

麻生路郎主宰

川柳雑誌

六月號



（行發日一週一月毎）號六第卷三十第 行發日一月六年一十和國 可定物運專種三第日三月三年三十正大

る據に法紙聞新證保有は行刊の誌本

魚つり電車

難波發每朝四時十五分
此電車に限り割引

加太深日
小島淡輪
谷川箱作
鳥取の莊



南海電車



社告

事務所廢止

今後、社務一切を發行所に於て行ふ
一層の御後援をお願いする

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

發行所

川柳雜誌社

電話 天下茶屋二五七九番
振替 大阪七五〇五〇番



川柳雜誌

第十三卷
第六號

六月號目次

文苑

川柳風景……………生方敏郎…(三)

川柳と松浦靜山侯……………石崎柳石…(一四)

川柳指導講座……………塚越正光…(一七)

武玉川二篇研究……………森本秋の屋
蛭子省二魚…(一〇)

川柳時評 東京から……………高須啞三味…(二六)

句 盜……………澤田四郎作…(三四)

三越二題……………路郎生…(三一)

金色蝙蝠……………不朽洞…(四九)

潮内相に告ぐ……………麻生路郎…(三)



「川柳時評の辨」……………啞三味生…(二四)

創作

川柳塔……………麻生路郎選…(四)

近作柳樽……………麻生路郎選…(三)

粒々集……………久流美・鞍馬・柳秀…(九)

日本名所名物川柳(京都の巻)……………山川紫明選…(五四)

一路集……………水谷鮎美選…(二六)

各地柳壇……………生田翠夢選…(二六)

編輯の窓……………路郎・艸樂・汀柳整理…(五三)

社關係の人々……………路郎主幹…(二)

川柳雜誌案内……………社告…(一)

表紙書……………表紙題字……………富本憲吉……………路郎主幹……………



川 柳 塔

路 郎 選

生 田 翠 夢

橋 本 緑 雨

逝く春をいたむ心の御亂行
すべりんこ櫻の下をするり抜け
青空の下を邪戀の厚顔まし
三下り唄は中途で忘れたり
寝ころべば野ばらの花も戀の譜か
鯉幟ふと追憶の涙なる
賣られゆく身に寫眞を呉れと云ふ
身勝手はこつちも惚れてゐた如し
鞦韆の女櫻を散らすなり

辯解をうなづくだけで差し向ひ
慾得の外に争ひつゞけてゐ

麻 生 霞 乃

これしきの事にも法規要る世かな
喋りまくつてもてゐる客と思つてゐ
サーピスの中へ呑むのも入れて置き

水谷 鮎 美

葱の香に春はみちかき風となり
天井を食べて和製のギヤングで
兒の尿へわが掌のやはらかに
春雨やわざく京へ濡れにゆき
子をおもふ風すぎゆきてひとり
指のうづみんなまいていていゝ社員
花名刺ぼろりとおとす外交員
鞆をおいて根上り松に腰をかけ

明 石 柳 次

味噌汁の香出勤せよといふ
酒くさい呼吸で嬉しいこと並べ
新妻へ花の名前をおしへられ
よく見れば校長さんも歌つてゐ
車掌の名覚えて下りる満員車

岡 本 雅 幽

塵拂ひ稼ぐに追はれる音を立て
ちまき好きな舞妓が白い齒を見せて
病上がり電車へ乗つて見たくなり
隠居所を何時建てるとか言ふばかり

ものゝ眞理は松風に聞くがよい
内縁で共稼ぎする釣しのぶ
日給の今退めるのを惜まれて
そんなによく寝られたものだ失業者
きつぱりと返事が出来ぬ金の戀

村に住めば(二句) 尼 緑之助

春をそき野の川しろく暮れるなり
有爲天變遠きく蛙きく
肩をもむ手振り養子の四十過ぎ

村 松 夢 裡

春の夢眠りともない子を寝かし
夢に描く女へ春の夢續き
さげすみくした金を借る
見直された顔へすまなく御辭儀する

朝 田 新 水

獨身のたゞ青空に一機飛ぶ
失職中など三男だけ逢はず
貞操を賣るは自分のものと云ひ
情慾のおかしな仕事して居れず
糞婆々と云ふ仲間にも算へられ

廣原都會人

夏近く貸ボート屋は灯を點じ
自動車に乗るが上手で端に座し
バス停める手附株屋と見られたり

西村明珠

出世した人に挨拶負けをする
飯がまだ出来ぬ子宵の空を見る
あらためて借ると正直者返し
貳拾圓以下の家賃をさがしあき
負け野球バットを杖にして歸り
天井が二つ丁稚の氣がそろひ
金かしてもらふ不幸を訴へる

岡田某人

擴聲器迷子を花の山に告げ
棺を覆うてどの人生も未完成
話題の女その後を凡化するばかり
何の繪だなどと子供におぼれ切り
男舞腰の弱さを叩かれる
お師匠は江戸下町の歩きぶり
色氣なく山車曳く役のボテかつら

白濱湯崎

遊覽バス揺れて景色が又變り

青木史呂

嬉しさは高下駄までも貸してくれ
若夫婦雨漏りにさへ笑ひ合ひ

石崎柳石

老杉があつて札所の時代めき
落書を讀むも札所の足休め

濱田久米雄

迎へ傘だまりこくつて手渡しぬ
打水へ自家用筋を引いて出る
ハイキング牛の巨體はふり向かれ

姫田夕鐘

ワンダン満壘へ殺生な相場
わらび狩山の向ふは雪らしい
土工等は白面の技師と思へども
腹の底割らす馳走が並べられ
酒肴三味も付きます宿でした

西 いわを

一寸した事を花嫁間違ひ
長男の馬鹿を他人へ叱りつけ
いゝ話金は後でも良いと云ふ
請求も出来ず結婚適齢期
子に教へらるゝも楽しき一つにて

喜 多 春 秋

遊覧へ山も流れもやはらかし
日曜に夫のあたまえらい雲脂
三百六十五日使はれてゐるお辭儀
どろぼうをつかまへました都會の子
花か花は咲いてゐた翌る朝

大 鶴 喜 由

征服をされる嬉しさ女もち
許す氣の唇へ腕力などだして
一文菓子儲けもするが子に食はれ

どのパスの券も用意の社交術
菜の花の中をつり竿だけが行く
邪が正に克つ現實に眼をそむけ

石 曾 根 民 郎

父となる道ひらけくる驚きも

温泉だよりをいただく

旅は青空かるく抱きし妓か
憂きことのおもさを捉へたる枕
四十尼ただ蒼穹に俟つころ

江 戸 み つ る

ハガキでは君だの僕だと女書き
ものねだる言葉へ女餘韻つけ
くちづけのものたならぬおんなとなりぬ

須 崎 豆 秋

タンタンタンタン瀬戸内海は鯛を釣り
とうがらしみたいに上等兵が酔ひ

速よいかな消えてしまふと火事見舞
明け方に近くきちがひ水となり
ひきがへるあちらを向けば午後になり

市場 没食子

伏線の言葉が憎いなさぬ仲
トラホームとはまた織子因果なり
使丁室こゝで不平をついこぼし
かきつばた甘い男やなとおもひ
徴兵保険に入る
のめきばれのびせ甲種になつてくれ

後 藤 青 兒

生命の保証はないビルの硝子拭く
汗出してまでも着る氣の合オーバ
校庭に櫻が咲くも大日本
百姓に感心される寫生する
現職である萬引の淡い息
火の見櫓と柳とあつて風涼し

奈良 井 柳 人

ネオン光り雨に濡れてる嬬曳の
蓬髪に殊更夏の陽が當り

碯 流之介

男と生れし五月山の大きいさよ

吉 田 水 車

相談欄こゝにも一人孕まされ
スター又焚付けにする手紙が來
今日よりは故國の土になじむ靴

町 田 承 春

ブランコは五月の風を切つてゆれ

奥 野 其 奥

トーカーを見て來た夜の風の音
遠足の生きて居たならあのくらひ

荒 井 英 賀 夫

刑務所に居ても代議士様は様
はつきりと云へばみだらな戀となり
妻子有る方入用の口があり

新見世間音

夕刊の一頁猪口の冷える記事
あの頃の尖鋭闘士孫を抱き
戀をする柄かと咽喉のとこまで出

三鴨美笑

友の轉校

榮轉の喜悅へ初夏の香が匂ひ
看護婦と云ふ身姉より氣が高し

宮岡白峰

嫁さんの村から届く梅青し
女學生今日は眞直ぐ歸りけり

月原宵明

白痴にも十九の春は來りけり
謝まつてゐるのは髭の生えた方
春の夜の底で理性と問答する
魂膽があつて三人乗り遅れ
重役と居て食慾を忘れかけ

粒々集

金澤 安川久流美

留墨の境地靜かに無我となれ

東京 富士野鞍馬

勝太郎に似てると勝太郎見られ

兵庫縣 長崎 柳秀

下積に馴れ貧乏に馴れ

子の出來ぬうちにと妻の襷がけ

流行におくれず子供風邪をひき

逢うた夢今も昔も同じ歳

事金に觸るゝや友も他人なり

晩酌は今日の辭令へ一つ殖え

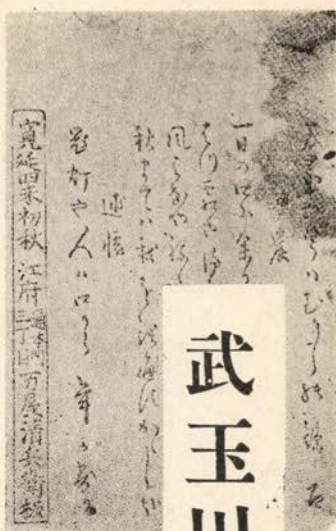
育兒法知らぬ女房の幸福さ

寶石部並び變るは賣れ残り

笑はせて置いて惡友金のこと

交際の上で決めると惚れてゐる

武玉川二篇研究 (二六)



梅 本 秋 の 屋
森 子 省 東 魚 二

(649) 大根馬ふせうく に引廻し

東 魚 〓 百姓が大根を積ませた馬を、遠乗りの武士などに、とげくとおどされて、路を避けるやうな場合かと思ふ。

秋の屋 〓 農家の被雇人が、馬に大根を負はせて、國中を引廻して賣るさま敷。

省 二 〓 「我馬に持あつかふや大根引」で、それを、ふせうく に引廻さねばならぬ事が、出来た場合。

(650) 氣の軽い母は見て居 水浴せ

東 魚 〓 「水浴せ」は水祝ひの水浴せなのであらう。

秋の屋 〓 心配する程の事でもないから、笑ひながら傍觀してゐられる。

省 二 〓 水浴せ、水かけ、水祝ひなどいふ。喜び事でもあり、氣輕なひらけた母親。——水祝の事は俳諧歳時記正月の部に記さる。其角に「こなたにも女房もたせん水祝」。

(651) 淋しさは炬燵やくらのゆるく成

東 魚 〓 炬燵も古くなり人も老ひたので、昔の戀の場面もあつたであらう炬燵を、淋しく思はれる。

秋の屋 〓 我等のやうな老人の身體も、古火燵櫓に等しい。

省 二 〓 實感句。ゆるくなつた櫓が、容易に取替得ないところに、淋しけれど味があるのだ。

(652) まからぬ心 瞽女の手を引

東 魚 〓 「曲らぬ心」で、正直に瞽女の手を引いてやるの

であらう。

秋の屋 此の「曲らぬ心」は、眞心といふやうな意と思ふ。

省 二 替女にふざけたりする句は前にあつた。それとは事かはり、いたはる心持ちで手を引いてやる。

(653) 母は箸にも楊枝にも栗

東 魚 何で栗を用ゐるのか。栗は耐久力が強いからであらうか。要するに實質的な處が、「母」にふさはしいのであらう。

秋の屋 栗の木を、楊枝や箸に造る事を聞かぬが、誤字ではなからう歟。

省 二 栗の箸はみて居るが、楊枝は請合ひ兼ねる。持ちが良い爲ではある。桃の木の楊枝は佳なりと。

東 魚 原本「栗」としか讀めない。

(654) 沈んで乳を隠す居風呂

東 魚 若い嫁さんであらう。恐らく乳の色が黒くなつてきたのを、キマリ惡るがつの事と想像される。

秋の屋 乳を隠すが身上である。

省 二 乳の黒ろ味まで考へて、句趣が働く。

(655) 鳥屋の見せのくらい年越

東 魚 鳥屋は小鳥屋であらうか。さすれば、年越の忙

しい日―夜に、小鳥屋へ入り込んで、あれこれ物色する客も少なからうから、早く店を仕舞つてゐるからであらう。

秋の屋 前解で異議なし。

省 二 お説通りならむ。私は鳥屋の軒に、食用の鳥類が、下げてあるからかと思つた。

(656) 畑の鶴をみせに遣る雪

東 魚 畑に本當に鶴が下りたのであらうか。私は大久保彦左衛門の話から、菜を「畑の鶴」と洒落たのだらうかと思ふ。若菜を雪の間に求めるのであらう。

秋の屋 鶴は田畑にも下るもので、私は幼年時代に屢々これを目撃した。彦左衛門には無關係であらう、これが菜ならば、摘みにやるとか採りにやるとか云ふ可きである。

省 二 本物の鶴―此句例には遠いが「鶴下りて質にとる田の面白し」(武十六)。私は朝鮮全南の島々に銃をかついでいつたが、鶴は田に常に下りてゐた。鶴だと思つてネラうと白衣の鮮女であつたりする。

東 魚 本物の鶴でも解かる。其方が適當かも知れない鶴の田畑に下るのは、私も朝鮮で目撃した。又龜有村附近が鶴の獵地であつた事も、「川柳江戸砂子」にみえてゐる愚説は「雪」を重くみたのである。

(657) 須磨の浦雛も柄杓に汲込れ

東 魚 須磨邊にも流し雛の風習があつたのであらう。

形代と同じ意味で流した雛が、汐波みの柄杓に汲込まれたのであらう。

秋の屋 〓 「源氏物語」須磨の巻に、光君が上巳の日に海邊へ出て禊をなし、人形を流すところを見る條があるその故事を採入れたものと思はれる。

省 二 〓 前二解にて盡す。源語に因て俳諧には、「須磨の御稜」の項目があつて「落足の内裏かなしや須磨の雛」(蓼太)とか、「さつとけふ須磨の祓や兵庫風呂」(一雷)など詠まる。

(658) 明星 かくるりとふれて淀へ着く

省 二 〓 明星が場所を替えたなアと眺める、時分淀へつく。「立廻る星の名をきく淀の船」(獨あるき)。

東 魚 〓 淀へつく處で川が大曲りになるので、明星の方向がくると、變化したといふ心持ちであらう。

秋の屋 〓 東方に看えたのが、西方にふれて看えるのだ。

(659) 恥かしの火燵の出来る煤拂

省 二 〓 十月上亥の日に炬燵開きをした。煤拂は十二月十三日行つた。故に煤拂に火燵が、始めて出来たといふのではない。一時取除いて置いたのを、煤拂に際して持出したので、「恥かしの」は若嫁御を指すならむ。

東 魚 〓 「恥かしの」とある句法が、上品さがあるから

許婚とか客分とか云ふ者が、愈々煤掃過ぎに、正式の式を挙げさせる。體て差合ひになるであらう炬燵と云ふ意であらうか。

秋の屋 〓 平素は奥座敷に置いた物を、煤掃の時には、人の目に觸れる店頭などに出す故、それに手足を温める花嫁や娘は、心に恥かしく思ふとであらう。

(660) 半夏生隣も合ぬ井戸の蓋

省 二 〓 半夏生は夏生より十一日目。半夏草が生える頃なので此稱ありともいふ。支那傳來のものだから、日本の氣温に合はすと感じがにぶい。舊曆五月二十一日を新曆に直すから、昭和九年は七月二日、十年は七月三日に相當した。雨がふるのを半夏水などいつた。「半夏水や野菜のきれる竹生嶋」(許六)。此日から梅雨が明けると稱し、半夏のはげ上りと云ふ。何にか毒でも降る俗信があつて、「半夏生ノ日ニトツタ生物ハ食フナ」。「半夏生筍梅雨蕨」共に有毒だとの謂だ。井戸に蓋をしようとしても、「平素用ひてゐなかつたので、合はぬのである。」

東 魚 〓 半夏生には、天より毒氣を下すと云ふので、さて目頃してない井戸の蓋をせうとしても、兎角に合はない秋の屋 〓 江戸時代には、日蝕月蝕の時に天より毒がふるとて、井戸の蓋をする習慣が有つたから、半夏生の日にも其様なことを爲たかも知れぬ。

(661) むかしの通り念佛て起

省 二 上七は、なんに對してなのか、判斷つかぬ。

東 魚 祖父や祖母が、よく起き出る時など念佛を唱へつゝ、やをら起きたが、自分も老境に入つてみると、やはり同じやうになつたと云ふのであらう。

秋の屋 昔の通り」が、何とも解釋が出来ぬ。

(662) 四ツ谷の埃に伊達染か行

省 二 伊達模様の如く、非常に大きく派手に染めてあるのが伊達染、——四谷は街道筋で埃っぽい中を、伊達染を着て通る。對照の味であるが、さて人物をなんと治定しようか。

東 魚 四ツ谷新宿馬糞で、駄馬など盛に通つた街道であるから埃っぽい。其中を堀の内參詣から新宿で遊ばふといふ手合ひ、が派手な衣裳で通る——法華は職人など派手な連中が多く信心した。

秋の屋 私堀之内參詣でなくて、大山參の方であると解釋する。

(663) 負た子の目はたきをする蓐簀編

省 二 子供を負ふて蓐簀をあむで居るのを見物して居る。一本々々編まれゆくので、目ばたきをする。

東 魚 編繩の先に木の丸の様なものが付いてゐて、そ

れを向ふへ手前へと、矢互に投げかけて編んでゆく。其度々にパタン／＼音がするので、見てゐる子供が目をパチ／＼させる。面白い句である。私も子供の時の記憶を辿つて、「簾あみ道場程の音を立て」の句を得た事がある。

秋の屋 此れは寫生句であらう。

(664) 生男も琴柱に落る中の町

省 二 「きをとこ」とは男許りの連中の謂。琴柱に落る雁などいふ詞もある通り、これは連中の吉原遊び。

東 魚 「琴柱に落る」は雁行するさま、三々伍々連立つて行く貌であると思ふ。

秋の屋 「生男」は生娘の對で、まだ女を知らぬ青年であるが、夫れが遊女を見初めて、墮落するのを、「琴柱に落る」と詠んだのである。美女を形容して、沈魚落雁など云ふから、此の句も生男を、落雁に譬へたもので、三々五々雁行して連立つといふ意ではない、即ち複數ではなく單數である。

(665) 髪かたち笠とかたちの内に入

省 二 人はみめより髪形といふ、笠の被り方で風情が違ふ。

東 魚 笠も又風情がある。句の調子が面白い。

秋の屋 婦人用の笠にも、種々の形のものが有る。「人は見めより髪形」は、「人は見めより只心」の誤りではない歟。

省 二 私もその懸念はあつたが、幼時母から聞かされた詞であり、爲念、尾張人に尋ねてみたら、やはりさう申すと言つた。



川柳と松浦靜山侯 (二)

石 崎 柳 石

此の柳多留初篇發行の年より四年前即ち寶曆十一年、江戸座宗匠達の支援に依つて聲望のあつた「誹諧武玉川」の選者慶紀逸は、六十八歳を名殘に致して居るのである。又この年より四年前、即ち寶曆七年に、川柳評前句附の創刊を見て、當時の數多い前句附點者の中にあつて、淺草金剛山龍寶寺門寺町の相傳三代目の町名主柄井八衛門氏は、その方面に於ても點者として斷然人望を集めて來たのである。それが今や四季庵紀逸の死に遇つて、中心選者を失つた「武玉川」評判の落目に際し、川柳評の高きに翕然と吸集せられて、機運は正に一句立句集たる柳樽を上梓して算盤のとれる下地が出来て居た。此處に着目したのが上野山下の櫻木連の木綿事吳陵軒可有氏で、バトロンの星運堂の菅裡氏を得て、茲に事實は川柳評、次は木綿選の二度篩にかけられた句集の出現とはなつたのである。勿論時勢は、田沼時代の、地方田園疲弊を外に、江戸は享樂贈賄都市として、水茶屋等までが全盛を誇つて居た頃であつた。こゝに此の發行を見て、淡泊簡明を好み樂天放笑に思をやる江戸ッ兒に、この

十七字短詩が、びつたりと性に合つて迎へられた次第である。當時の蕉門亞流の似非風流宗匠達に、少々ならず鼻もちならなさを感じて居た連中は尙更らに此れを迎へたことであらう。茲に川柳普及及び發達の素因があつた。そしてそれが昌平の文運隆盛、庶民の學問普及に乗じて、他の民衆文藝と共に所謂江戸文學を構成して行つた。

が、とまれ化政度の川柳は、多數の作家群を擁して居たにしても、所詮遊戲の文學でしか無かつた。穿ち可笑味に終始する放笑も、嫌やに文字をひねくり持つて廻つた一種の謎めいた智的遊戲であつたのである。

○
これらの時勢粧の中に成長し來つて、終に江戸文化の極盛期と稱せられる文化文政期――

「林氏云、世道人心は僅の年月を経る内に替るものなり、予若かりしときを云へば、長きことのやうなれど漸く四十年計なり、それより前の事は童齡ゆゑ覺えず、先士大夫の咄に、互に

勝手あしきなど云ふことは更に無きことなり、各不勝手をば包み掩て人前にては云ず、是己の不甲斐なきを恥てなり、今は相互に内證不摸通（補不摸通不審）りを語り合て恥ともせず、遂に諸侯さへもみなかくの如く成行けり、又婚姻養子の談など、家柄を論じ、血縁を訂し、人物を評することをおもとして、資財の多寡を議すること無かりき、今は餘の事は構はず、只管資財の多寡を論ずることゝなれり」22卷

とある如く、世は町人の経済力膨脹して、事實町人富豪は、江戸京阪共に、金權力上の貴族、大名であつた。かうした町人階級の勃興は、一面に於て大名、武士階級を経済的に壓迫して金が物を云ふ世を實現せしめ、彼等の放恣な慾望を文化の享樂方面にはけ口を求めしめて行つた。それと反對に、形式的な體面を保つ大名、武士階級は、頻りに富豪に媚びて借金するの風を生じ、武士の町人化の世とはなつた。

「林叟曰、今の世の人才は皆程の知れたる人才なり、其故は人々限り有る望なれば、人才も其限りだけに成り、萬石大身の人は官位の高きにより外に望なし、其次は權要の職となり人を屈伏させるまでの望なり、萬石より下は一資半級を爭ひ、升斗の加祿を希望し、末路の榮達は萬石格までのことなり、陪臣は主家限りに權勢名利を得んと謀るのみ、されば今の人才は限りある筈の事、大才は無き理なりと笑ふ」14卷

これが大平の風枝もならず、弓は袋に、刀は鞘に細身と變じた、四民のいづれに在した武士階級の眞實相であつたのである。

○穩やかさ猪牙と四手が飛道具 43 篇
○金銀を猪牙と四つ手で捨てに行き 29 篇
金力の謳歌に、階級撤廢の一大歡樂社交場は、云はずと知れた江戸の北國

○日本をすこし下ると美人界 34 篇
の不夜城内に生女菩薩様のおがまれる吉原ではあつた。此處に町人階級の享樂文化の華が咲く。

○無いといふつはものゝ居る御不勝手 44 篇
○たびゝの不幸藏宿わらつて 44 篇
これが川柳詠の當時の武士階級である。

「或宴席にて人の語りしは、或國持衆の退隱せられし後、その豪氣に任せ花街を訪ひ、娼樓に登て遊興せし中、今日の馳走には鮫汁を出すべしと命ず」59卷

これは又大名階級の時世粧の一挿話である。

「世の奢侈に移り行くは歎息すべし、隱倫の身の與らざることなれど、聞く所を識す、此春戲場助六狂言のとき、傾城總角の外一白玉と云ふを、岩井紫若が爲しける、其裝束に、上に着し打掛の小袖五つ、其下は白繻子の無垢に抱一隠者（これは先きに驚山と稱せし姫路侯の弟にして、今は僧道に入り等覺院と號せり、最も書に巧なり）繪がきし墨畫の雲龍、その上なる四つは金銀にて置あげの金具紋様にしつらへ、獅子或は草花等なりしとぞ、その費金六百餘兩なりと、曩日俳優衣裝の美麗を禁ぜられ樂は苦しからず、都て地合は木綿たるべしとの町奉行の應にて申渡し有て、役者共大に困りしと聞しが、今はや箇

様なることに至るは奈何にぞや」續一巻

これも時勢である。これらを背景に置いて、茲に静山侯の川柳觀を檢討してゆかう。

「川柳と云る點者あり、輕浮鄙猥の事ながら、十七字の内に自在に含蓄したることを言ひおこせたる手際は、其徒の右に出るもの非るべし（中略）柳樽と云書數卷刻布す、世人の翫も宜なり」4巻

「川柳風の點者は、輕俊の才今も衰へざるにや、其採し句として近頃聞く（下略）」28巻

「奥勤の畫工下城し來る者、懷中より一つの狂句を出し示して云、今日殿中にて其の見ゐたるを傍看して寫せりと」34巻

「川柳點の秀句は鄙野なれ共、人情には協へる者なり」96巻

「川柳點には毎に感ずること多し」42巻

「川流句のことは、毎度賞歎せり」續36巻

「川柳の口才には、深思せざれば了解を得ず」59巻

「川柳派の句は、鄙野なれども、世事人情に委曲通貫せるには感歎せり」59巻

上掲の如く、川柳の稱號に就ては色々の文字が用ひられて居るが、卑俗なるものにて、世事人情を貫いて表現し得てゐると賞歎して居る。川柳が、卑俗とは當時の感情表出の露骨さを忌み嫌つた儒學的教養裡に在つた武士階級の言としては、當然な言分であらう。

「卑俗の事にて、その本を知らざれば末は違ふなり」51巻
「大岡越前守は、名譽の町奉行なり、瑣事までもよく下情に

通じ、その敏捷なるを想ひやらるゝことあり」7巻
上に立つて政を司る者は、特に下情にも通達してゐなければならぬ。大岡越前守の名町奉行たるの所以は、この點に基づき來ると説いて居る。かゝる見地よりすれば、當時川柳句がすらすらと解せらるゝことは即ち市井の下情にまで通達して居ることに成り、下情上達の輕捷は川柳に在りとも謂はれるであらう。この點に就て、靜山侯は、川柳に多大の關心を持つて居たのである。（未完）

麻生路郎編著・柴舟漫畫

累卵の遊び

定價 壹圓
特價 捌角
圓錢拾六

四六版一六〇頁・新入・洋書三十二號

川柳の妙味を骨を折らずに味つて貰ふつもりで噛んで碎いて摺り餌にしたのが「累卵の遊び」であるとは著者の序文の一節である。

阪大川柳會編纂・路郎序

川柳句集

累卵

定價 壹圓
特價 捌角
圓錢拾六

大阪帝國大學の中で生れた異色ある川柳句集である。（自注二〇〇頁）
本句集は非賣品であるが阪大川柳會に請ふて特に川柳愛好家のため頒布することにした。
残本僅少至急申込みあれ！

發行所

不朽洞

振替 大坂 三〇三
電話 二五七九
茶屋 二七九

大阪西區玉出
本通三丁目六地



期待に反した旅

— 川柳指導講座「旅行」 —

塚 越 正 光

暑くなし寒くなし今はまことに旅行のシーズンである。この時にあたつて「旅行」の集句を見ることがまことに倅ものと云はなければならぬ。ましてや私がジャアナリストの世界へ飛び込んで初めてといふ、忙しさと慌ただしさの毎日を繰返してゐる今日此頃、集句を見ない内から旅にでも出るやうな、嬉しい氣がしてゐる。

元來私は旅に出るのに荷物を持つて出るのが嫌ひで、手ぶらで出かけることが好きなのだが、宿へついた時は手ぶらでは何うにも格好がつかない、ばかりではなく修善寺では斷はられたことがあつた。尤もその時は遊びの席から脱け出したので着流しで帽子も外套も

ないのだし、途中で自動車も捨てゝふところ手で玄關へ、たつた一人で立つたのだから敬遠されても仕方がなかつたが、何處なら何處と目的のある旅より、銀座を歩いてゐるうちに急に汽車へ乗りたくなつて出かけるといふやうな旅が好きだつた私には、荷物などありやう管がないが、サラリーマンになつてからはそんな呑氣な旅などしたことがない。そこで銀座からそのまゝ旅の人になり

でせめて體慣をはらすより仕方がない。

諸君の集句を見る前に私達の先輩は「旅」をどんな風に詠んでゐるだらう。それを一つ調べて見て諸君の參考にしてみることにする。

旅行用玩具のやうなのを揃え 萬 柳

人に逢ふ旅の心のあからさま 雨 吉
旅人に見られまいよに旅をする 水 府
獨り旅空氣枕に戀もなし 久 流 美
底の底からお土産が無事に出る 緑 天
いづれも大正、昭和時代に名作家の名を謳はれる人達だけに、それ〴〵の佳さがある。さて諸君はどんな風に「旅行」を詠んだであらうか、一句一句検討することにする。

旅行して愉快があつて思ふ 母

どんな愉快なことがあつたのか知らないが母を思ひ出した……母親にもこれを味はせたいと……のであるからそれは想像して出来なないこともないが、それだけの眞情は汲みとれない、それに旅行して愉快があつてとぶつぶ

つ千切つたやうな調子もなだらかではない。

旅先の第一報は母へ宛て

とただ母を思ふ眞情だけを句にした方が無難である。(句主 東淀川區 小貝君)

村長と見えぬ旅の朗らかさ

作者は斯ういふ事實にぶつかつたのであらうとは思ふが、この村長には必然性がない、といつて他の人物に置換て見た處が結局は句主の實感とは遠いものになるだけであるから村長と思へぬ旅の朗らかさ

と誤字を訂すだけにして置かう。(句主 島根縣 さわだ君)

時計にも物が云ひたい一人旅

淋しさを誇張した叙法は苦心の痕が見えるがこれをもつと深化して

一人旅時計と口を利いて寝る

としたら、そこにユーモラスな味が出て來はしないだらうか(句主 北區 春巢君)

商用のついでに名所觀に廻り

中七までの表現の良さを下五で壊して仕舞つたのはまだ經驗が浅いからかも知れない、どうせ壊した次手に組立直してみると

商用の旅へ蒐印帳を買ひ

として難に廻らうとする前を描寫したが、句

主に首肯いて貰へるかしら(句主 東京市双亭君)

大盡に見られて寒し旅の宿

旅だの遊びだのはふところ以上に見られた方がいゝ心持のものでもあり、又さう見せかける人間の方が多い、だとすればせめて勘定を支拂ふまでは寒がらない方が面白相である。それにしても大盡とは又古風な表現を用ひたもので、それならそれで全てを古風にしたい。

お大盡ほどに待つく御旅館

待つくは、かしくと讀み、御旅館はおんり

よかと讀む。(句主 大阪 せいち君)

初旅行やつぽり宿も赤い帯

單なる初旅を詠んだものではないらしいが、といつて新婚旅行とも解し難い、どつちにしたところで句主が最も重點としてゐる赤い帯がちつとも生きてゐない、といふことだけはつきり言切れるが、まあ出直して貰ふより手はないやうである。(句主 尼ヶ崎市 南邊路君)

旅日記雪書きそへて汽車の窓

中七まではなだらかに來てゐるが、いきなり汽車の窓などを持つて來たので面食らはせ

られる、なまじつかな道具立より、旅日記なら旅日記だけを見つめた方が無難である。先輩の句に「失敗を大袈裟に書く旅日記」といふのがあつたが、この句も

旅日記雪の深さを書き添える

ぐらゐのところとめて置いた方がよかつたのではあるまいか。(句主 西區 淡路坊君)

旅行團浴衣の足らぬ賑かさ

これでは旅行團が浴衣を持つて行つたやうにもとられる處れがある。

團體へ浴衣の足らぬ賑かさ

とすればその心配はないし、旅行といふ課題は詠込んでなくともそれとうなづける。(句主 大阪 水客君)

たまさかの旅行BKは雲後雨

雲後雨は曇後雨の書き誤りと解してもこれでは困る、言ひたいだけのことをみんな言つて仕舞はないことも何かを思はせる、それを餘韻といふ。そこで

氣象通報を大切に母の旅

だがこれは下五でたまさかの旅行と人物を働かせて見たつもりである。そしてこれならBK管内ばかりでなく何處へもつて行つても通用すると思ふ。(句主 此花區 峯月君)

護送されてこれも旅行のうちになるか

例へばこの句が實感だとしても、それを生のまゝで出したのでは決して川柳されてゐるとは言へない。それは藝術的……川柳的にと言ひ變へてもいゝ……濃過されてゐないからである。これを添削しやうとしても、私には實感がないから手におえない。まあ敬遠するより仕方がない。(句主 今治市 憲一君)

見る書報一度行きたいとは言へど

書報は名所舊蹟とは限られては居ない、演劇もあれば映畫もある、又ニュースもある。

見る書報と行きたいと言ふことだけで旅行とまで思はせることは出来ない、成程作者は旅行といふ課題で作句してゐるから、その心算ではあらうが、そして叙法としては前の句と同じことでもあるから繰返すのは止める、句主も諸君も参照されたい。(句主 螢ヶ池 善朗君)

白濱のお温泉で旅行の荷をまとめ

温泉と書いてゆと讀ませることもあるからおゆと讀ませたつていゝ筈だが、温泉と書いていゝゆとも讀ませる場合もあるのだから、この場合おは要らない、といつてこのまゝでは句にならない

白濱の浴槽貴方と言へた朝

これではあまりに句主の意志を蹂躪しすぎた憾みなきにしもあらうだが、句型はとゝのへたつもりである。(句主 浪速區 みさを君)

旅の宿寝れぬ瞳へ兒が映り

越後の人は寝られぬを寝られぬとか、出られぬを出れぬなど云ふが、この句も越後の人かしら、私は斯ういふ片言は例へそれが便利だとしても句語にしたくない。この場合旅の宿眠られぬ瞳へ兒が映りとか

旅の宿寝られぬ眼へ兒が映り

とでもすれば、片言から救はれる句の價值は別として。(句主 東淀川區 靜城君)

旅行好きスタンプ帳を手離さず

この頃のやうなスタンプ流行だと旅行をしなくともスタンプマニアにはスタンプ帳が手離せない譯である。従つて旅行好きが利かないことになる。

スタンプを蒐めるだけの旅へ出る

とでもしたら時代と人物が稍描寫し得たのであるまいか。(句主 大阪府 紫香君)

土産ものつり銭のない歸り路

天狗俳諧といつて上五は上五ばかり、中七

は中七ばかり、下五は下五ばかりをみんなて

んでんに勝手なものを作つて、それをつなぎ合せてよくついたものを頂戴する遊戲がある。この句は恰度その天狗俳諧で頂戴の聲がかゝる程よくついてはゐるが、實はばら／＼で何處へポイントを置いていゝのだからさつぱり見當がつかない。句主も恐らくあゝでもないこゝでもないといひねくつてゐるうちに、こんな形に出来上つてしまつたのではなからうか。前述の先輩の句の土産ものを參考に讀んどいて貰ひたい。(句主 大阪府 柳狂君)

ボーナスの旅サラーマンの朗らかさ

ボーナスで旅へ出る位ならサラーマンと斷るまでもない。又ボーナスで旅へ出る位なら憂鬱でありさうな筈がないと云つたら、實も蓋もないが、恐らく句主はボーナスを貰ふ人種でなく、従つてサラーマンでないのかんな句が出来たのではなからうか、何はともあれ一句にするまでには、サラーマンなり、ボーナスなりをもつとよく見つめなければいけないとだけ言つて置かう。(句主 島根縣 達三君)

女房に頭が上らず旅行好き

婢天下の難を逃避するよすがの旅行好きに

しても、それではまず／＼頭が上らなくなるばかりである。旅行好きなので女房に頭が上らない方が面白くはあるまいか、だとすれば

ある時は妻に濟まない旅にゐる

とでもして、旅先での感傷を詠んでみるのも一つの方法である。

(句主 大阪府 雌雄君)

ゲートルで今日は役所の旅費でたつ

このゲートルでが作者の個人感情で、對者に共感を與へることが出来ない。然しどうしてもそれでなければ作者の感情は盛れないのかも知れないとすれば

ゲートルをつけて官費の旅に居る

とでもして、山間への出張旅行らしくても詠むより仕方がなさ相である。(句主 仁川府 奇文君)

以上を見渡すと旅行の實感を與へて呉れる句は一つもない、といふのが頭の……或は机上の……産物であるからであらう。流石に以下に記す添削を要さぬ句にはそれが濃くはなくともにちみ出てゐる。

逝く春をとほしい旅費で母とゐる 葉光

朝風呂でみがいた頭で旅へ出る 呑空子

旅先で患者の事も氣にかゝり 通夫

行語りぶらりと旅へ出る文士 柳昌

公用の旅報告書まとめて 寝 年次郎

葉光君などはもうこの講座から卒業してゐる筈であるが、新人生をリードする意味で句を見せて貰ひたいとも思つてゐる。

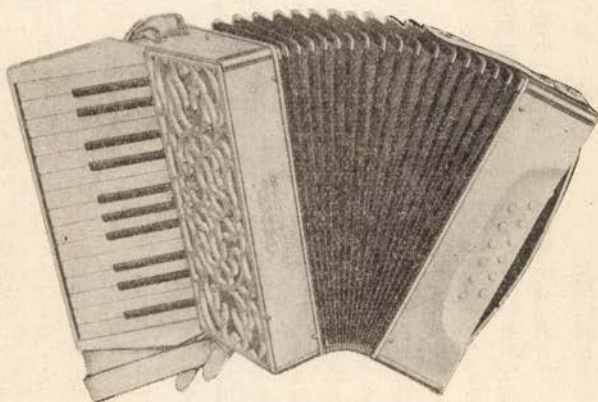
さて舊作で恐縮だが私の句を添えるから諸君一ついゝやうにしてみて貰ひたい。

旅で聞く子守唄たゞ淋しすぎ

ヤマハ アコーディオン

10號	¥10.00
20號	¥17.00
30號	¥23.00
40號	¥28.00
50號	¥40.00
60號	¥60.00

カタログ送呈



60號 ピアノアコーディオン

山葉ピアノオルガン製造元

日本樂器會社大阪支店

大阪市・西區・四ツ橋南
電話新町一〇七三番



三越二題

三越の燐票

燐票蒐集家のスクラップで、百貨店の部を繰り摺げると必ずそこに○に越の字のマークのある燐票を発見するに違ひない。これこそ傳統三越を象徴する唯一のもので、圖案を少しも取替へないところに三越らしいドツシリさを見せてゐる。太閤が秀吉で黄門が光圀、百貨店が三越で代表されるのも斯うした根強さが生んだものらしい。おそらく百貨店の燐票ではこれが一番古いだらう。こんど出来た八階のホールでは新らしい圖案の廣告マツチが備付けられた。大阪の新文化が更にこの燐票からスタートを切るのかも知れない。

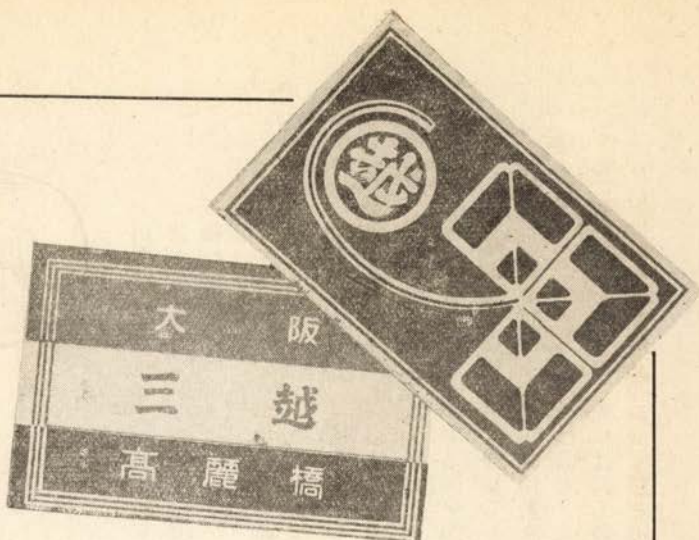
白名さんを偲ぶ會

六月十二日の午後二時から、三越の八階ホールで、大阪支店の前宣傳部長白名民憲氏を偲ぶ會が催された。白名さんは一月に東京本店の宣傳部長に榮轉して未だその椅子のあたゝまらない五月二十五日に腦溢血で急逝されたのである。大阪支店では十八年間に七代の支店長を補佐した白名さんだけに、知名の士が澤山集つた。會は高尾亮雄氏の司會で嚴肅に、しかも親しみ深く行はれた。私は次の句を白名さんの靈前に捧げた。

君ひとり早引といふかたちなり

路 郎

歸途、岩崎愛二氏と談合つたことであるが宗教味をぬいたこんな會がいくね、それに久しく會はない誰彼にも會へるし、形式的な人は來ないのだと云つたらそれでもやつてくれる人がなければ出来ないと云はれて見れば、それもさうである。故人の徳が私の歩いてゐる初夏の舗道に光つてゐた。





川柳風景

生方敏郎

川柳は

詩だよくと

觸れ歩き

オレも亦

詩人であると

川柳家

ふやうな文字が繰り返へし見える。又會などで逢つた川柳家が、立つてテーブル・スピーチをする時「川柳は詩である。」と旺んに強調するのを聞く。

「川柳は詩である」など、今更らしく主張し、種々と七面倒な理窟を付けるので、私は驚きもし、又バカらしくも思つたのである。川柳は詩だよくと、事新らしく觸れ廻らないでも、昔から夫れは詩も詩、詩の本家本元なんだから、人々よ御安心あつて然る可しと、私は茲に云ふ

のである。

又、川柳家が七面倒な理窟を並べて變挺な詩論をしたり、詩人氣取りであつたりすると、却つて夫れは夫子自ら川柳の好材料と成るものではあるまいかと、一寸可笑しくなるのである。

皆さんも先刻御承知の事とは思ふが、川柳は詩であるとして面倒な理窟をこねるよりは、先づ一通り其發達史を御調査になれば、それが何よりも有力な自信を得られることになるのだと思ふ。

普通の和歌から連歌が出、連歌から連句が生れ、其中最初の一句即ち發句が獨立し、壇林の發句から桃青芭蕉が蕉風を起した。此蕉風の子孫が今の俳句で、云はゞ壇林の分家である。其後川柳も亦た同じ根幹から分岐した、之も新店だ。夫れ故古いところへ源泉を遡つて行けば、俳

句も川柳も連句も連歌も皆一つ、即ち短歌へと戻るので、もう之れだけ系圖を明記したら、夫れ以上理窟を捏ね返へさなくとも、川柳が詩歌の一形式たる事は立派に證明せられたわけである。

○ 勿論纔な例外はあるが、和歌は萬葉以來すべて詠嘆である。然るに連歌となると、兎に角一方が上の句を口吟めば、直に他の人が下の句を付ける。吾妻鏡を見ると、頼朝と梶原景時又其子景季などが夫れをやつてゐるが、後世織田信長と紹巴などになると、信長から下の句を先に口吟されて、直に紹巴が上の句を吐いてゐる。

恁かる性質の物として、是非とも即吟でなくては面白くない。之を宿題として家に持ち歸り翌日附句をして來るなんて云ふ氣の利かない話では、たとへ好く出來ても感心されない。當意即妙が連歌の生命だ。そこで機智頓才が尙はれる。夫れが苟もすれば洒落になる、遊戲になる、と云つた順序だ。

徒然草で見ると、連歌の會で懸賞を得た僧が、それを持つて歸る途中、犬を見て狼と間違ふか何かして川に落ちる話がある。してみると此頃即ち足利時代の初期には早や連歌が大に流行し、懸賞などもやつてゐたのである。連歌は當時から遊戲化してゐた證據だ。

此連歌の流れを汲んだ俳諧が、又機智頓才に富み、又一方遊戲文字が多かつた事は争はれぬ事實だ。松尾桃青が之に満足せずして蕉風の一派を樹立するに至つたのはまた素より道理のあるところだ。而かも夫れが剛毅嚴肅を尙ぶ封建武士の心に投じた事は、恰も榮西等の禪宗が鎌倉武士に尊崇されたものと一般だ。蕉風は短歌の如き單純に情緒を吐露した詠嘆ではなく、其主觀は殆んど表面に見出されない迄に理智の力で抑へ付けてゐる。理智以上の力一寸茲に一言で云へないが、眞劍嚴肅を通り越して得た安心、淡々たる風雅、先づさう云ふ境地へ迄芭蕉は發句を運んで行つた。

だが、一般人の好尚は必ずしも誰も芭蕉のやうである筈が無い。別に機智諧謔といふ廣い大きな世界を足場とする俳諧の本流は、尙も盡きず流れてゐる中から、今度は川柳が生れて來た。此方は又、蕉風の方で全く無價値と看做して取捨てた部分だけを拾ひ上げて、之に澄澗たる新生命を吹き込んだのである。

失れ故、蕉風と川柳とは何れも俳諧の支店とも叛逆兒とも云へるが、此二つは一は右へ一は左へ岐れて出たので、蕉風の方で「川柳なんか詩でたまるか、」と云へば川柳の方でも、「冗談云ふな。此處らこそ俳諧の本流だぞ。」と威張り返して然る可きだと思ふ。

「川柳時評の辯」

噺 三 味 生

本社、東京支社長福田山雨樓氏から、六ヶ月ばかり「川柳時評」を書けと命じられて、川柳界に時評のないのを遺憾に思つてゐた僕が、それではと覺束ない筆をとつてから、今月でもう六ヶ月である。

最初の僕の案では、所謂全國川柳界の時評のつもりであつたのであるが、本社編輯部の都合で、それが東京柳界のことに限定されてしまつたので、實は時評としては非常に書きにくいものとなつたのである。

そして、いやしくも時評といふからには、褒めることよりも、苦言を呈することを主とすべきであるといふ僕の主張で、僕は多く苦言の方を受持つて來た。従つて、近頃僕の東京柳界における存在は、甚だ煙つたものであるらしい。丁度御命令の期限もきれたのでこゝらでこの時評の筆を擱かして貰ふ方が賢さうである。



日本名所
川柳物名

山川紫明選
朝賀大鱗畫

(二) 島 原

道中の傘を擴げた日本晴
島原へ出る春の開易者ゐる
洛 風 林
外

(卷の都京)

併し、今後とても何等かの形式で、僕は時評といふものをやつて行きたいと思つてゐるので、時評そのものの辯をこゝで少しして置きたいと思ふ。

といふのは、川柳家は元來批評といふものが嫌ひらしく、批評されるとすぐムキになつて辯明するが、それが大抵論旨への辯明でなく、言葉咎めであつたり、批評家への人身攻撃であつたりするのは、困つたものである。

そして、それが結局理論をはなれた論争になりがちであり、往々「兄弟牆に闘ぐ」の觀を呈し、事勿れ主義の大家達を慥感させることがあつても、それは本當に「兄弟牆に闘ぐ」のとは違ふのだから、決して恐れることはないのである。たとひそんな中心をはなれた論争でも、川柳の論争でもある以上、いくらかづつは自他を利してゐるだらうから……。

僕が本誌に時評の筆をとつてから、今月で六ヶ月、随分にくまれ口を叩いて來たのも、僕にさういふ信念があればこそである。本誌のこの時評は、これで一應うちきるとしても僕は今後とも柳界批評は止めないつもりなので、僕の批評に對する信念をあきらかにしておく次第である。

あきらめて歸る島原隴月
士間暗く長持光る揚屋町
島原の柳へ長持摺れて行き
八文字踏む道中へ花が散り
太夫の腫動いてゐると不審そう
島原を抜ければ浴衣寒くなり
島原を出る白足袋へ陽が高し
島原を出れば今から昭和なり
島原の朝を眩しく通り抜け
島原にカフエーのある面白さ
島原の一夜明くれば京訛り
通辯と島原を出る隴月
島原を巡查はにべもなく通り

泰一 桑岳 晃洲 榮壺 水客 新水 憲一 佐蘭 世間 木履 葉光 紫香

名所名本日

宛先本社事務所・用紙ハガキに限る

京都の巻 選者 山川紫明氏
(九) 八ツ橋 ×切六月末日
(十) 永觀堂 ×切七月十日



一路集

募集句

電車

水谷 鮎 美 選

働きにゆく身電車の音に知る せいち
人ひいた電車はみんなおろされる 幸 捐
花の山電車に母の席がなし 美知夫
終電車みんな疲れた色ばかり 晴 二
車窓から花火が見える夏祭 小 判
つり革を握る指環の偽ダイヤ 柳 夢
あきらめて歩けば電車追ひ抜ける 菊 路
電車待つ間疲れた子がしやがみ 春 巢
花電車車掌の帽も花をさし 柳 昌
戀人と別れて歸る電車にみ 魔 公
スパークも遠く電車は暗に消へ 斗 風
新ら服もうれし電車のまへに立ち 美津生
沿線に住んで電車で朝の風呂 方 眠
ルンベンの電車をすてゝ何處へゆく 東狂子
(佳)出勤と還ふ電車のこんでゐる 古 杖

(〃)吊皮にしつかりもたれ義足です 章 泉
(〃)花電車いつものバスでよいのなら世間音
(〃)二三臺電車を待つも戀があり 笑 山
(〃)見送りの電車ボブラへかすかなり山 月
(〃)春雨にしつぱりぬれて電車着き 紫 香
(〃)赤とんぼ走る電車へうまく逃げ 憲 一
(〃)僕一人残つた電車よくゆれる 遠見路
(〃)たゞ走る電車と思ひ木を 讀 み 新 水
(〃)電車から降りる思師を見つけたたり宗 正

舞 妓

生 田 翠 夢 選

(秀)何時までも電車の客で小銭貯め 文 庫
(〃)片戀のおなじ電車に今朝も乗り 四 塊
(〃)電車から降りるはづみにつきあたり 石 燈 籠
(〃)電車から一丁といふ假事務所 いさむ
(〃)春なれや電車のなかで踊り出し 正 風
(入)貸切の電車童謡のせてゆく 新 七
評 電車待つまのひとゝきの陽のなかの夢
が走る情景とも言へよう。
(地)から電車シートの青く静かな夜 由 布
評 動姿觀にとらはれすぎ電車自體をこ
んなにまで静姿視覺されてゐることは
たしかに優れてゐるとおもふ。
(天)電車カーブしてコスモスがのびてゐる 水 客
評 生活川柳の異彩と賞したいサラリーマ
ンシツプをきやつちしたひとつの哀愁
と優美さの人生詩のかくてゐるでもあ
る、應募句中の白眉である。
(軸)電車即ち佛心の有りぬ可し 鮎 美

ロケーションの様に舞妓が街をゆく 遠見路
世智辛き世を知らぬげに舞ふ姿 茅 泉
チヨコレート好きな舞妓の片えくぼ 青 柿
繪の様な舞妓に逢ふた春の宵 恵源太
お座付へ舞妓習つた臺詞なり 正 柳
櫻坊、舞妓の指が生きてゐる 知美夫

食ふ外の慾出て舞妓ませて来る 古杖
舞臺面見れば舞妓の高さあり 章泉
腰付きは半玉としては大きすぎ 柳夢
ワンダフル舞妓へカメラ向けられる 新七
舞妓からからかはれてる面白さ 葉光
或日ふとトンカツを食ふ舞妓を見 當峨山
京訛りも嬉し舞妓にとりまかれ 朔風
舞妓等のエキストラとして撮される いの助
晴れやかな舞妓の影に涙を見 雌雄
帶つた姿舞妓の大人じみ 路可
春の宵舞妓は一人淋しそう 十風
米の値を知らぬ舞妓の美しさ 晴二
心から舞妓になつて好く目立ち 小判
舞妓でも職業婦人でございませ 青磯
振付は春や舞妓の晝の三味 木履
舞妓には舞妓としての意地があり 春巢
舞妓には舞妓でワテの意地があり 勝
舞妓はん個性のまゝの晝の街 堯子
舞妓もう仔猫の様にざれたがり 千隈
花の下舞妓の袖に散る櫻 悲戀坊
舞扇ぎ舞妓の手には大きすぎ 靜城
且はんの檢舉を舞妓解しかね 澄風
すねるにも舞妓姿をとゝのへて 東狂子
浮世繪の様に舞妓のあでやかさ 峰月

ストッキング舞妓の足に見付けたり 凡樂
舞妓から片假名交りの手紙来る 世間音
貯金する趣味を舞妓は持つてゐる 曉童
唇のサイン舞妓の大人びて 水客
雜魚寝して舞妓を小供だと思ひ 笑山
棧敷から棧敷へ舞妓手で話し 菊路
春風へ舞妓困つた顔を見せ 紫煙
灯にゆらぐだらりの帯に唆られる 四塊
團體旗舞妓も春の眺めなり 幸捐
姿とは別な心で舞妓舞ひ 大頭領
妹にこんな舞妓が欲しい夜 魔公
舞妓にも金の力がわかつて来 方眠
舞妓にも個性のあつた口を割り 兄兄
(佳)生きた人形さも知らず舞妓派手にゐる 臨住庵
(〃)舞妓もう好き嫌ひなど云へぬ年 いさむ
(〃)札東へ舞妓は何ンにも知らなんだ 自由郎
(〃)心から笑ひほんとに泣く舞妓 文庫
(〃)襟替の近き舞妓の沈み顔 朔風
(〃)女から見ても舞妓のにくしめず キミ女
(〃)生みの親知らぬ舞妓の帯を垂れ 新水
(〃)舞妓にはまだ幸福な座敷なり 鈴の家
(〃)物足りぬことを舞妓は知りにはあ 三角山
(軸)手にな觸れそこはれそうに舞妓ゐる

高級・・・

撞球場開設

ローテーション
ボケツツト 一臺

四 ツ 玉 二臺

玉突を詠んだ川柳

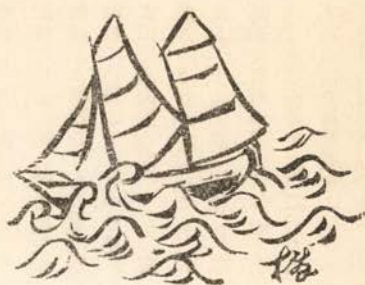
いつ稽古したか重役五十撞き
玉突屋音より早く聲があり
球を撞く片眼に泌みる巻煙草
隅の球きつと見据える大廻し
引き球へ身になるやうな顎をひき
寄せ球はないしよ話のていたらく
てぬぐとしやばん玉突屋へ忘れ
仲のよい姉妹がゐる玉突屋
突切つて淡い誇りの中にゐる
御曾子この玉突で戀が出来

大阪市上本町四丁目
バス停留所西ノ四ツ辻南

ピリヤード

川柳

電話南六四四番



川 柳
時 評

東京から (六)

高 須 啞 三 味

三浦太郎丸君の句集

「夢」を見て

東都柳壇の名家——即ち、現柳壇屈指の
名作家——三浦太郎丸君の句集「夢」が、本
年度の東都柳壇の收穫の一つに算へられるこ
とは、僕のようなこびである。

特に、「夢」はたゞ或川柳家の句の集められ
た本といふだけのものではなく、現柳壇自身に
とつては一つの良きコビブックであると同時
に、現柳壇が他の詩壇に示す好個のサンプル
ブックとして、僕はこの句集の出版に、二重

のよろこびを感じてゐるものである。

そこで、本集の内容を少し解剖して見ると

作者の親友で現柳壇で最も信用し得る評論家
たる早川右近君は、本集の跋文に於いて、先
づ作者の警拔さを稱揚し、次にその飄逸さを
讃へ、そして「彼は決して飄逸と警拔のみの
詩人ではない」と言つてゐるのは、流石に親
友の言である。——この跋文は、柳界最近の
名文であるが、それは問題が違ふので、別の
機会に評させて貰ふことにしよう。併し、こ
の跋文あるために、この句集が一段とはつき

りした存在を示してゐると言つても、過褒で
はないと僕は信じる。

さて、その飄逸について、右近君は

父の姉とかでのんこのしやあで居る

といふ句を擧げてゐるが、なるほど太郎丸君
の仕事をみてくると、さういふ「飄逸」の詩
味が一番多いことに氣づく。この句集から、
ちよつと拾つて見ても、次の數句を示すこと
が出来る。——本句集三百六十五句中、約五
分の一を占めるものは、この部類に屬する句
である。

馬方が来ると黙つて馬歩き
仙人掌は半年経てど元の儘
冤罪を着てゐる猫がふと覗き
學窓を出てめき／＼と長い顔

スタートへ頭をかいて一人来る
のつぼうが一人ついてく樽神輿
ハンモック怖い舎監の夢を見る
いゝ子持とつかまへて洗ふなり

これは、先づ「川柳」の姿としては、最も
認容され易いものである。従つて、「川柳」を
これ以外に出ないものと考へてゐる人は、一
般人は勿論のこと、現柳人の中にも相當ある
と思ふ。——これ以外に出ないといふのはま
だいゝ方で、これ以下が即ち「川柳」だとい
ふ人達が多いのを、僕はいつも歎かしく思
つてゐる。

今更そんなことを言つても仕方がないかも知れないが、「川柳」といふものは、その最も
悪い一面が、最も大衆に認められ、愛されて
來てしまつたので、「川柳」と言へば、すぐ

居候三杯目にはそつと出し (古句)
持參金嫁なけなしの鼻にかけ (古句)

といふ奴でせう。實にうまいことを言つたも
のですねエ……と、その皮肉の一面だけが知

られてゐるのに驚いて、いやそんなのは別に
いゝ川柳ではないのですよ、こんなのの方が
ずつといゝではないですか、と

團扇では憎らしい程叩かれず (古句)
恥かしさを知つて女の苦のはじめ

などを示すと、それも川柳ですか、併し川柳
はやつぱりエゲツない方がいゝではないです
か、となかなか認識を改めてくれないのが、
今までの常識であつた。

それには勿論、我々の先輩も悪かつた。川
柳ルネッサンスに當つて、幾多苦艱の道を通
つて來たその先輩達に、我々は感謝すべきも
のは感謝するとして、誤つた道を説き、誤つ
た道へ行き、イージーゴーイングな道のみ通
つて來たやうな先輩達には、こゝらで一度苦
言を呈しておいても、早くはあるまいと思
ふ。——但し、個々の主張や、個々の方向に
ついて言ふことは、先輩への個人攻撃と誤解
される處があるので、それはこゝでは控へる
とするが、我々の先輩が、川柳復興の道を開
くに當つて、良い道ばかりを開いてくれたの
でなく、悪い道への木戸をより大きく開けて
くれたことを、僕は遺憾に思つてゐたのであ

る。勿論、道としてはその方が安易でもあり
楽しくもあつたであらうが、それだけにたゞ
追隨をこととする多くの後輩のためには、一
つの罪惡であつたとさへ言へる。

議論が少し抽象的になりすぎたので、具體
的にすると共に、本題に戻すと、三浦太郎丸
君のもつてゐる飄逸さは、よき飄逸さではあ
るが、それが永い間「川柳」にかぶせられて
ゐたお面の一つで、我々の先輩の多くも、多
くその面ばかりを示して來すぎた、と僕は言
ひたかつたのである。

即ち、今我々の最も尊敬し、以て範として
ゐる先輩柳人の三太郎氏にしても、路郎氏に
しても、周魚氏にしても、水府氏にしても、
過去に於ては、その「川柳」の面をあまり尊
重して來すぎはしなかつたか？

古い柳誌などを見てみると、それら先輩の
妙な句を發見して、オヤと思ふ事がよくあ
る。それは、その先輩達の揚棄してきた殘骸
であらう。が、そのプロセスを認める事の出
來ない若い川柳家達の中には、今でもそれを
川柳詩の一つの姿と思ひ込んでゐる人達があ
る。その現柳人の誤れる認識に對して、我等
の先輩はあまり責任を感じてゐないらしいが

僕はそれを先輩達の責任の一つとして、今後の認識のため、それが揚棄物である事を明示して貰ひたいのである。

そこで、太郎丸君の問題に戻ると、太郎丸君と雖も、川柳生活の前期においては、殆んどその方面の運動にたづさはつて来た。殊に君は川上三太郎氏に影響されるところ多く、我々の所謂「三太郎調」川柳の信奉者であつたかに見える。——併し、今度の句集には、輯録に際して、大分さういふ前期の句をオミツトしたらしいが、それでもなほ

凸凹をはつきりさせて尼僧立ち

などに、はつきりその傾向のあつたことを示してゐる。これは、太郎丸君自身の足跡としては、オミツトしきれぬものであつたらうけれど、この句集が、現代川柳の現在の姿として他に示されるためには、一つの夾雑物ではなかつたかと、僕は思ふ。

所が、君の川柳の中に持つもう一つの面、「警拔を見ると、それは實に比類なき警拔さである。さればこそ、右近君もそれを第一に擧げてゐるのだが、事實警拔は智的なものであり、飄逸は偶感的なものであるから、飄逸

は川柳家の大部分がもつてゐても、警拔はなかなか兼備へてゐないものなのである。——その例として、僕は本句集から、次の數句を擧げることが出来る。

蟻の列縫目のやうにまだ續き
地の底の景色のやうに鍛冶屋暮れ
湯たんぽは駱駝の背中ほど古び
敗軍のやうに遠足雨に遇ひ
びろうどを撫づるが如き月夜なり
山茶花の咲けたやうに散る日向
佛像は夜そのものに似て黙し

これは、皆「比喩」の川柳ばかりになつたが、「比喩こそは藝術である」といふ言葉は誤でなく、古來すぐれた比喩は、皆すぐれた藝術であつたことを想へば、この川柳の「比喩」などは、川柳の最も誇示すべき面であると共に、今後の川柳のためには、太郎丸君等の斯ういふ力こそ、最も必要とされるものと僕は信じる。

こゝで、ちよつと注意したい點は、前の飄逸と警拔との差と、比喩と形容との差についてである。飄逸と警拔は、前述の諸點で大體つきてゐると思ふが、もう少し説明を加へれば飄逸に對して警拔は知識的であり、飄逸の表

層的なのに比して、警拔は内容的であると言へる。で、今後の川柳詩のためには、性格的な飄逸さよりも、修養的な警拔の方が大切だと、僕は考へる。

そして、比喩と形容は、その警拔さの度を示すもので、單なる形容の川柳は、まだ警拔とは言へぬ程度のものである。僕などは、機會ある毎に「やう」と「さう」の濫用をいましてゐるが、それは「やう」や「さう」を濫用すると、川柳が單なる形容に終つてしまふことが多いからである。併し、この太郎丸君の數句の如きは、實にすぐれた比喩で、「やう」や「さう」はこんな場合にのみ、すぐれた用語として役立つことを知らねばならない。特に最初にならべた二句の如きは、現在我々の行かうとしてゐる川柳詩の、ある一つの完成した形であるとさへ、僕は考へてゐるのである。だから、お前達のやつてゐる「川柳」とは、どういふものか、ともし他詩壇の者がたづねたら、僕は後掲の十句と、この數句を示して、昂然とこれが僕等の「川柳」だと言はうと思つてゐる。——僕が本句集を、對内的には御手本であり、對外的には見本帖だと言つたのは、そのためである。

そこで、僕のこの句集に對する不滿をいへ

ば、この句集が三浦太郎丸その人の業績の全體に重きをおきすぎた點で、僕としては太郎丸君の現在の川柳觀を、この句集で明確に示して欲しかったのである。即ち、「夢」を三浦太郎丸川柳生活二十年清算帳としてでなく、三浦太郎丸現在句集として欲しかったのである。——僕は、句集が前者の形ではないけないといふのではない。前者の形で現す句集ならやはり句は年代を明示して排列すべきだと考へてゐるのである。

それで、この句集中の、次の二句について僕はその點をもう少しはつきり論じたいと思ふ。

一枚の銀貨私窠子の手に移り

百姓は時に怒つて庭旗

これは、僕に言はせれば、詩ではない。一は文字の遊戲であり、一は觀念の遊戲である。川柳復興の先輩の中に、この觀念遊戲の道へ行つた人があり、その人の影響は、太郎丸君にあつては、本當は三太郎氏よりは強かるべきわけであるから、太郎丸君が一時その道へ足を踏込んだのは當然であるが、流石に聰明の君は、それが詩の道でないのに氣づい

て、急遽道を變へたらしい。で、其の足跡の中に、斯ういふ遊戲が幾つかのこつてゐることは、太郎丸君個人の歴史として却つて尊いかも知れないが、現在の川柳詩として、一般に示す作品としては、僕は前期の作品の多くと共に、斯ういふプロセスとしてのほんの短期間彷徨時代の作品も、この句集からオミツトして欲しかったと思ふ。

僕がこんなことをいふと、その先輩の後に正しいと思つて歩いてゐる一派及び自分達の川柳こそ詩だと自負してゐる一派の連中から激しい攻撃を受けるであらうが、それを承知で僕はこれを敢へて言ふのである。

例へば、前の句で「私窠子」といふ文字の面白さを抜いたら、何が後にのこるだらうか

——原句には、私窠子とあるが、それは誤であつて、私窠子が正しい。「五雜俎」にある詞で、私娼中の土妓のこともある。——即ちその私窠子といふ字を、同意の平凡の字に置換へて見たらどうか？

一枚の銀貨私娼の手に移り

一枚の銀貨娼婦の手に移り

これでも、この句は面白いだらうか？と僕が言へば、或一派の論客は、この句の面白

さがわからないのは、それだけの事柄の中に含まれてゐる社會觀、經濟觀がわからないからだ、こんな悲痛な事實に對して、これ以上の言葉がゐるものか、と言はれるだらう。だから、僕はそれを觀念遊戲だと言ふので、字の面白さからはなれたこの句と

百姓は時に怒つて庭旗

とは、まさに觀念の遊戲以上の何ものでもない、僕は斷言して憚らない。——併し、これらの句に對して、これ以上言ふことは、僕と或一派の詩論になるから、ここでは止める。たゞ、僕の言ひたかつたことは、太郎丸君の始き純正川柳詩人と思はれてゐる人の句集に、現代川柳詩運動の初期に屬する作品の多くと共に、ルネッサンス以後の混沌期に屬する作品の幾つかが同居してゐることの混沌についてであつた。

これは、この句集が、太郎丸君個人の單なる川柳記念集なら、何ら問題にすべき事ではないのであるが、最負の引倒しで、僕はこの句集を「現代川柳」の典型といふ最高の位置において論じたかつたので、つい強い言葉で批評してしまつたのである。——川柳の源泉「柳樽」といへども、必ずしも名句のみの集で

はない、とはよく聞く言ではあるが、「柳樹」の句集としての性質は、一朝一夕に論じられないとしても、一口に言へば現在の柳誌の如き性質をもつてゐたのであるから、個人の句集とは問題は自ら別である。そこで、個人の句集について、極く大別した性質を言つてみれば、その人の足跡を録したものと、その人の完成した代表作を輯めたものとの、二つに區別出来る。そして、句集は必ずその何方かに、はつきり限定すべきものである。それが混亂してしまつては、その句集に對する價值づけはむづかしい。——即ち、僕はこの太郎丸君の句集——を、後者として論じたかったので、思はずも苛酷の評を下したので、前者として見れば、たゞたゞ頭が下るばかりの句集である。君の川柳生活二十有餘年、多くの落伍者、迷走者をよそに、よくぞその細い恵まれない川柳の道を、正しく歩まれて來たものと、尊敬と共に親愛の念のいよゝ深まるのを覺える。左に、本句集中、僕の愛誦おく能はざる十句を録して、この妄言を打切らう。

珍客へ子は話したくなつてくる
悲しげに夢の中なる子の睫

女工いま退けてちらばる風の中
母の手に負へぬ宿題子と淋し
空想は嬉しくなつて歩くなり
錢湯で父さんに疵そつと見せ

川柳家戸籍調(續)

(係) 縁 雨

- (1) 姓名 (2) 雅號及別號 (3) 生年月日
(4) 生地 (5) 現住所 (6) 職業又は勤務
先 (7) 好きな句 (8) 自信の句 (9) 川柳以
外の趣味 (10) 配偶者子供の有無 (11) 嫌ひ
なもの (12) 川柳に手を染めた年月

(以下)

本橋坊茄子

- (1) 本橋清貞、(2) 坊茄子、濁流洞 (3) 明治四年一月三日、(4) 河内の州、(5) 大阪市北區金屋町二丁目一七、(6) グライダー及自動車研究、(7) 酒とろりく大空の心かも(路郎、情痴の風景ヘリッブスステイツクが折れてゐた(愚陀)、物干と煙突畫の月さびし(鮎美)、(8) オブライトに包んだエロのにがさなり、苦熱の空に日葵の立ちつくす、(9) 酒、おでんや、そしやるだんす、(10) なし、(11) ぐざつくばらんぐを解せない奴、(12) 昭和六年頃水谷鮎美雅兄より手ほどきを受く。

猿の瞳に寂寥として冬の影
母の瞳とあつて黙つて子は眠り
病む人の首を擡げて背なりし
女の子ちつとはにかむのをこらへ

(以下) 玉井彩泡

- (1) 松本照美、(2) 玉井彩泡、(3) 明治三十三年六月八日、(4) 松山市唐人町一丁目、(5) 大阪市天王寺區石ヶ辻町七四、(6) 洋服裁斷裁縫師、(7) 豆秋氏の句が一番好き、駄句を作らぬ沐天氏、春光氏、德三氏の句には何時も引きつけられます、(8) さげられる姿となつた鼠の尾、(9) 魚釣、新劇、洗練された浪曲、(10) なし、(11) 蛇、(12) 川柳愛好は久しいものです句會等に出席し始めたのは昭和七年十二月妹尾變人氏に教へられて作さる様になつてからです。

(以下) 飯田十九柳

- (1) 飯田三富郎、(2) 十九柳、(3) 明治四十二年四月二十日、(4) 岡山縣眞庭郡落合町、(5) 大阪市住吉區平野西ノ町八一、(6) 目下なし、(7) 咳一つ聞えぬ中を天皇旗(劍花坊)凡聖一如元旦の心知る(路郎)、(8) 動かない障子はづれる迄拗れる、逆らつて見たがやつぱり親でした、(9) 民謡、野球、(10) なし、(11) 浪花節、(12) 十九歳の時。

潮内相に告ぐ

★巡査の月給を倍にしなさい★

巡査のレベルの低下したこと今日より甚だしい時代はない。現職巡査が未亡人に暴行する。泥坊する。萬引する。疑獄に連座する。バタチの上前をはねる。殺人をやる。巡査も又人間である。何んでもやれぬことはないといふサンプルを見せられてゐるやうである。

ない時にはモツト朗らかにやれぬものか。今日も道を歩いてゐたら巡査が洋館の派出所の前を制服のまゝ竹箒で掃いてゐる。エエ心掛の巡査やなあと思つたが、胸のボタンをみんな外づして竹箒で掃いてゐる姿はあんまりみづともいゝものでないので、私が掃いてあげませうと云つて竹箒を受取らうとしたがなか／＼渡さない。まあ、あんたは胸のボタンをはめなさい。私が掃いてあげますと云つたら

なか／＼常識の發達した巡査もある。即ち判る巡査もある。が、變に巡査氣質を出して常識を逸脱した巡査もある。日本人の禮儀で出したお茶すら飲まない巡査すらある。こんな巡査の方が反つてイザとなると危ぶないん

片手ではめにかゝつたが、それでも箒は渡さない。私も無理に掃きたい譯でないから止めて彼が掃くさまをながめてゐた。

ちやないかと思ふ。私位巡査を人間として扱つてゐるものはないが、巡査の方が反つて巡査扱いにされるやうに尻込みする。ナンでも

派出所の前がすつかり綺麗になつたので私は引きあげることにしたが、セルの着物に髭を生やした私が掃いてゐても、アンマリいゝ姿ではないが世間から見れば非番の巡査に見

えて、いゝかも知れない。

一體、肅正だ取締だと内務省あたりで騒ぐけれども今の巡査の俸給で兎や角云うのは云ふ方が間違つてゐる。

ブラッ

威張ること十若干の金が巡査の俸給である
と自他ともに思つてゐる間は巡査のレベルの向上なんてのぞむ方が間違ひである。初任給を七八十圓か百圓位出せばどうにか巡査の體面も保てやうし、裏長屋や、二階借しなくてもよからうし、物欲しさうな顔やホンの小さな漬職なんかしなくても済むだらう。さうすれば變に空威張りしなくてもいゝ巡査、公衆のよき叔父サンとしての巡査が出来やうと思ふ。ソんなにするには豫算がとおツしやるかも知れぬが、さうなれば今の半數は愚か三分の一の巡査で事が足りると思ふ。

叔父サンのやうな巡査ばかりになつたら、暴漢を取押さえるのに困りやしないかと云はれるかも知れない。それも尤である。それに備へるためには武力専門の巡査を置くのである。ソレには劍術や柔術の先生や力士の古手を使ふのである。古手を使ふのが好きな日本だから。(略)

句

盜

澤田四郎作

挿畫 小川武

この頃、私の興味をひきつけたのは、某氏の他人の原稿剽窃事件である。旅と傳説の百號紀念にある「民族と土地と言葉」の一文が、吉田弦二郎氏のものであり、これが動機となつて、同氏のみの原稿を盗用し

これに單なる著作權侵害問題と云ふよりは、寧ろ、醫學上、特に精神分析上の興味である。われ／＼は、その複雑な心理の錯交をおもふとき、「定一人キリ」のエログロ事件以上の興味を感じる。

來ること二十年に近いといふ事が發見された。同號には、私も一文を稿してゐるので、

人間の盜心といふものは、石川五右衛門や鼠小僧の次郎吉さんの特異性ではない。

某氏のこの文章も讀んでゐたので、そのとき、何だか一度讀んだ様な氣がしてならなかつた。教養のある人が他人の文章をあつちこつちから盜むことはあつても、同一氏の文章を永年にわたつて、一句もたがえず、盗用し來つて、單行本まで出した例は、おそらく世界にもその例がないと思はれる。

よく考へてみると、たれの心の中にも、盜み心がないとは言へぬ。少年の頃には、歌や俳句や川柳を作らうとする初心の頃は、よくこの盜み心がおきてくるものである。膽つ玉の小さい人間は、甲乙丙などから一節づゝ盗んで迷句をでつちあげる。頭のとつべんに穴のあいた圖々しい人間は、有名

な昔の句をそのまま盗んで、自分の作品にして、選者の天地人に選ばれて、はじめて自責の念に出臍を噛むのが一般の習慣であるらしい。

町醫者をやつてゐると、いろ／＼の面白い人間がやつて來て、無心を吹つかけてくる。無言で這入つて來て、うや／＼しく一禮をして、フクサに包んだものを差し出す。どこの御禮かと、慾ほけ顔にあげてみると、汚い帳面がある氣味わるくおそるおそるあげてみると、私は癩病で、これから草津へ養生に行きたいのでお錢をくれと書いてある。大抵の新婚人の留守宅では、この手でこられると、癩病の文字にびつくり

して、こんな者に支關に居据られては大變だと五十錢玉でも投げ出させる仕組であるが、その顔を見ると、少しも癪病らしくはないので、人をいやがらせて金を取る新職業である事を知つてゐるから、チャツカリ撃退して、氣分のためにリゾールでも撒いておく。折々は、帽子をかぶり、セルの袴をつけて、冬でも扇子をもつた村風子然たる人がやつてくる。田舎の大神樂のおやちさんが、寵神のお禮くばりの風體である。これも例によつて、うや／＼しく一禮をして、フクサの一物を家人に傳達する。さきほどの偽癪人にこりてゐるから、すぐ手出しはせぬが、フクサの形が、少し長すぎる。ハテなど、疑問をもつ事を習慣づけられて來た科學者？ は、まへの禁をわすれて、手にとつてみると二枚の短冊が出てくる。

松の上に月のありて蛙鳴く 撫村

古池や蛙とび込む水の音 芭蕉

私は愉快になつて診察室に通つてもらふ事にした。挨拶もしかつめらしく、「かねての御高名を慕ひまして」と至極丁寧である。私の名をどこで知られたかときくと「

只今道を通つてゐると看板でお名を知りました」とあつて、明かに私の敗北である。四國は高松の遊行俳人だと自稱してゐる。古池やの芭蕉の句と、貴方の句とどう關係があらいますのやと、うかゞつてみると、前者は私の句で、後者は芭蕉さんの句やとある。御尤もですが、撫村といふと、口から出かけた私は、例の盗み心が頭に浮んで來たので蕪村の句のすきな私は、一わたり句を暗じたまの、こんなまづい句はなかつた筈である。私のこのげせぬ態度をみてとつたか、あの蕪村さんは、草冠に無の字ですが、私の方



は手扇に無の字です。以前國にゐたとき、マツサージをやつて居ましたのといふ。なるほど按摩さんだつたから、撫村とつけられたかと、感心さゝれて、五十錢奉納して、御歸還をお願いした。こんな人は、とき／＼やつてくるが、つまらぬ感心は、結局五十錢玉の損をさせられる事を體驗してからは、會はずに歸つてもらふ事にしてゐる。幸ひなことに、私は未だ且つてかうした川柳遊行子の御來光をうけたことがない。川柳の御本山たる麻生路郎先生のお城下のせいでもあるうか。(一一、五、二七)



近作柳樽

路

郎

選

食客のかゝる時子を抱いて出る
 紙捨てゝ水の心になるし
 とりたてゝ悪い事なし頼りなし
 袂から心靜かなチヨコレート
 鰻屋の景氣は籠を積み重ね
 旅にゐる人とは見えぬノハット
 不身持へ押しつけ氣味の嫁が来る
 つくつくし上りの汽車のなつかしさ
 門にベル付けて子のない夫妻なり
 一面にまぶしい朝のちり、拂
 銀行の利子よりましな家を建て
 憶ひ出は烏ヶ丘のクロールパに

仁川

博多

大宮

東京

可宵

同

同

同

玄風

同

同

天國

同

同

佐保蘭

同



自由主義それも軍部の氣に入らず
 花は咲けども證文と老眼鏡
 日蔭の子生んで殖えて哀れなり
 あの方と思ふお人の疑獄沙汰
 子に甘く妻にも甘く子守する
 住込にやる子へ貧乏言ひ聞かせ
 安全地帯遅刻しさうな奴ばかり
 砂ぼこり立ち切り職業紹介所
 金策に行く道バット一ヶ買ふ
 南風花ほころびぬ床上げぬ
 滿洲へ行けば忠義が落ちてゐる
 紡績の花見に惜しい三味が鳴り
 旅役者この熱と意氣買へと言ひ
 くちづけのそれから後は會ひもせで
 貨物車の響傳はる映畫館
 女事務焼増代を出すと言ひ
 運命だなどと卑怯に生きて居る
 幸せは花嫁と云ふ姿だけ

大 阪

同 沐 天

松 江

同 遠 見 路
同 讓 二

今 治

同 里 子

松 江

同 山 川 兒

愛 媛

同 其 沙 子

同



辛抱とは働くだけの事らしい
片戀の空の深さを見てゐたり
ハイヤーの右に左に松並木
職のない春を寝そべる裾が冷え
春なれや八百屋の若菜花を持ち
死ぬ氣で來た水の深さが恐ろしい
葉牡丹へ雀からんだまゝ落ちる
あすの朝兄が來るまでもつかしら
臨終になでてもやれぬ指の冷し
沓下がにほひ生活苦がにほひ
逢ひに來て濡れた自動車から降りる
大部屋のまゝで婚期はとうに過ぎ
廣告マツチを貰へばまたものふところ手
大袈裟に社長の洒落を笑ふなり
會社では親の知らない名で呼ばれ
桃色の遊戲みじめに妊んでゐ
道行も大詰となる汽車に乗り
失戀を慰む友が先に酔ひ

山口

神戸

島根

大隈

名古屋

神戸

大阪

加古川

同 狂 路
同 三 迷 子
同 一 鴻
同 玻 瑠
同 蕪 人
同 陽 出 男
同 冬 郎
同 迷 魚
同 天 秋



無死滿壘投手一瞬ヒロイズム
 春來れば又アルバムに寫眞ふえ
 鍵の音さしてお錢をかへてくれ
 七圓の家賃に家相いふとれず
 一人酔ふて三人乗りおくれ
 アメリカの發見よりもこの煙草
 手本より一步も出でぬ繪を習ひ
 四捨五入したりされたり生きるのか
 吞むことが御自慢といふ氣の毒さ
 振袖で來て病室をきたながり
 思ひ出になつた寫眞のぼけてゐる
 制服の來る野に花は散つてゐる
 タぐれに兄弟仲が直りさう
 新婚の甘さ會社へ傘が來る
 家具部だけ落付き見せた百貨店
 大法螺が去んでみんなにくさゝれる
 交渉へあの手この手と使ひわけ
 野に山に花は咲けども出ず嫌ひ

大 阪

兵 庫

今 泊

平 北

大 阪

神 戸

小 木

鎌 田

同 宗 夫

同 通 夫

同 憲 一

同 三 角 山

同 秋 無 草

同 せ い ち

同 凡 樂

同 晴 二

同 翠 峯



田の中でどつち向いても春霞
 太陽を揺がす金魚鉢の波
 鹽漬をする程仕切り直すなり
 飼鳥に似てゐる嫁入前の姉
 ドグロ巻く形でスダンドしまはれる
 儚なさは槿花一朝前議員
 支拂日いつも御主人不在なり
 秀才の中尉フラウを美まれ
 散兵線陽炎がゆれ春がゆれ
 寫眞より肥えてゐますと書き添へて
 おみそれをしたりされたりなつかし
 世を捨てた口のしたから株を買ひ
 初七日の過ぎて竹馬の乗りてなし
 サーベルの音にも春が訪れて
 女の子お嫁にゆくと答へたり
 電球を代へに四男と三男と
 洋服で風呂へ行く日があり多忙
 上る人下る人清水の鐘の音

尾崎

同 正 柳

松江

同 須磨夫

大坂

同 いの助

島根

同 柳大佐

平北

同 松女

兵庫

同 斗風

尾崎

同 斗風

同 觀月

大坂

同 いさむ

大坂

同 みきを



道で會ふ舞妓はツンとよけて行き
 葡萄酒を達者な友に笑はれて
 春夏秋冬デパートを散歩する
 隠居屋の餘寒煎藥漂はせ
 人生のコース火葬場へ軋り
 帳尻を合せてた智恵を惜しまれる
 茶を入れて呉れて派出婦よく喋べり
 看護婦のきり紙細工盗み見る
 ベン先の乾く思案にある吐息
 水も人もとろりパラソルだけ赤い
 省電の景色の中に分譲地
 店先の紙屑主人足で寄せ
 買収が知れずに済んだ人格者
 胚芽米學生氣分のぬけぬ妻
 天城は春よ猿のこしかけ見付けたり
 國の力も亦認めさせられ病んでゐる
 霧の如く青空の如く讚美歌の
 代表の個性を見せて負けとなり

名古屋

豊ケ池

大阪

名古屋

神戸

名古屋

東京

長野

堯 同 一 同 水 同 正 同 木 同 兄 同 四 同 柳 同 靜 同
 子 更 客 穂 履 兄 塊 兒 路



放心の姿に似たりネコを抱く
 美しい人と話してけつまづき
 英語など讀めて縁談氣にくわす
 春長閑香具師とサクラが話し合ひ
 子が出来て持論が少しゆるぎ出し
 花の酒爛のよしあし言つてゐす
 樂隊の太鼓はいつち馬鹿に見え
 金が邪魔とはさま／＼な戀もあり
 お中日ラヂオお經の聲となり
 寝ずに待つ妻もあらうに膝枕
 穴ばかり掘つて日永の弟子大工
 外出にも主婦・妻・母として多忙
 サラリーに訊けば頭も下げ足りぬ
 薄給をさいて巡查は拜まれる
 星空へ私娼も同じ女にて
 掌のまゝになるは水道のネジばかり
 茜空想ひかなつた髪の艶
 朝のパス娘と娘向ひ合ひ

松江

同 銀坊

大阪

同 一六

大阪

同 利生

磯島

同 方眠

大阪

同 菊路

十三

同 牧人

大阪

同 鐵心

松江

同 比呂志

大阪

同 淡路坊



それつきり會はず友達國へ去に
 ペン一本紙一枚の趣味に生き
 あの月は姉の居所知つてゐる
 鹹なんぞ思ひもよらぬロツカー順
 パスガール顔を見られる聲の好さ
 ほろ酔ひに手をにぎられてノーチツブ
 百合の花わびしくたれて純喫茶
 浅ましい記憶法座に暗くゐる
 核心に觸れず上手にしぼられる
 灰皿の白さのまゝに客は待ち
 深きねむりのうらやまし工夫等まひる
 背の君に寢卷の柄を選まれる
 ネクタイをかへあなどられまいとする
 電話する聲にも個性表はせり
 旦那はんへ舞妓ちつちやな慾を言ひ
 ネクタイの柄から若さ忘れ初め
 朗らかになつてハズをば淋しませ
 足音が當り留守居へ戻つて來

神戸

大防

京都

大坂

朝鮮

長野

大阪

京都

大坂

伊豫

徳島

名古屋

同 基 克

同 廣 々

同 逸 苦

同 同 苦

同 同 苦

同 同 苦

同 同 苦

同 同 苦

同 同 苦

同 同 苦



マートルで講釋されてねぎられず
 この垣を越えまじ湯女をつき放す
 ひさし洩る光に春のひそみ來る
 計量器兵隊検査が氣にかゝり
 高架線都會の裏を見せてゆき
 質朴な方言の飛ぶ座談會
 淋しみをふかく林檎にかみしめる
 醫者が來る日はおとなしくねてゐたり
 みち説けば已に聞かす聲となり
 重役が一番遅い合オーバ
 シヤンデリヤ經營困難とは見えす
 昇給は炭一俵とネクタイよ
 ビルの屋根ラデオ體操らしい列
 ゲーム取日の出を拜すこともなく
 病名を女どうしが語りあひ
 爪皺を氣にしてマダム戀があり
 踏切へ助手走らして細心な
 朗かに酔ふて女給に嫌がられ

和歌山藩

大阪 廣島 大坂

松江

西宮

兵庫

大阪

松江

東京

大阪

伯耆

松江

名古屋

松江

松江

小見 明坊 春帆 銀濤 蛙 頓知木 圭之介 正風 朔風 春巢 登美也 魔公 紫香 弘子 小判 榮之進 八白 抱月



浅春の俄に背が痒くな
 完璧な顔でカメラの前に立ち
 酔ひざめの水にも母の手をとられ
 まだ生きてゐるよと唾をベツと吐き
 添ひ遂げてさて朝々の辨當箱
 上敷にかへて芽出度い座敷なり
 苦勞した親の意見は愚痴になり
 顔剃りに行く氣になつた下女の戀
 別嬪へロイド眼鏡の位置を變へ
 現實はこの寒さにも水枕
 宿直がちと多過ぎる倦怠期
 算盤へ父の意見に無理がなし
 友訪へば牌の音する春の宵
 青物ばかりのまゝごとに五月の陽
 子の出来た兄へ無心の切なさよ
 状態のように平たくなつて死に
 理髪店證書一々額に上げ
 病弱な子の綴方甲ばかり

新木	大坂	今治	大坂	島根	大坂	神戸		大坂	島根	大坂	今治	大坂	高知	山口	今治	朝野
宗	次	惣	自由	大	小	吉	自由	柳	南海	さ	静	曉	七	臨	悲	恍
正	郎	吉	太	朗	貝	右	郎	好	男	だ	城	童	步	庵	坊	二



い つ ま で も 寒 い 心 の 街 の 春
 口 笛 で 来 て 煙 突 が 掃 除 さ れ
 あ の 人 も 追 風 に 帆 あ げ た 紀 の 國 屋
 お 花 見 へ 行 く に も 母 は 珠 數 を 持 ち
 地 位 名 譽 あ り て 壽 名 に 見 は な さ れ
 支 那 言 葉 眞 似 て 見 も す る 支 那 栗 屋
 起 き し ぶ る 顔 へ 時 計 を さ し つ け る
 離 縁 さ れ た 姉 に す ま な い 内 祝
 目 の 先 へ つ ぶ さ れ に 來 る 冬 の 蠅
 タ 刊 も ラ デ オ も 明 日 は 明 日 は 雨
 左 手 は ハ ン ド バ ッ ク に 取 ら れ て 居
 剃 刀 の 使 命 以 上 に 働 き し
 ど こ ま で も 前 科 の 影 が 付 き ま と ひ
 姉 は 嫁 き ま す 私 は 戀 を し て ゐ ま す
 釣 道 具 揃 へ た 非 番 雨 と な り
 波 紋 ひ ろ が り 淋 し さ は つ き ぬ
 ニ ア 人 へ し ば し 輪 と な る 水 す ま し
 デ パ ー ト の 朝 は 賣 子 が 撰 つ て く れ

大 阪 府	東 京	大 阪 府	朝 鮮	兵 庫 縣	廣 島 縣	朝 鮮	高 松	大 阪 府	信 州	大 阪	朝 鮮	奈 良	高 松	朝 鮮	兵 庫 縣	京 城	京 都
櫻 紅	史 葉	千 代 吉	當 峨 山	向 治	都 子	惡 源 太	柳 夢	公 子	千 隈	住 雄	東 狂 子	青 柳	廉 夫	石 燈 籠	由 布	奇 文	定 俊



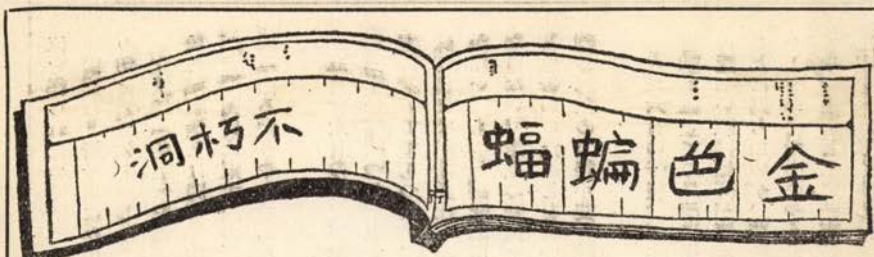
口角力に負けて女給は惚れるなり
 交際は年末賞與だけを呑み
 告知板いつち終ひは彼女の手
 花と散る警官があり日本國
 大掃除おちぶれてゆく家具家財
 新妻の子供一人をもてあまし
 故郷からの土産は八百屋店のやう
 春の戀土筆狩等案じ出し
 月給の話題になると黙すのみ
 卷頭のもの縛られてゐる伏字
 一錢の貯へもなく美まれ
 君が好く紫だから僕も好き
 丸刈の男らしさを女言ふ
 孝養をあびてしづかに永眠る父
 毎日のソロバンの喧嘩やめられず
 三十を過ぎて厚司がよく似合ひ
 旦那様の手の堅い事と舞妓云ひ
 めしつぶを數へるやうに喰ふ女

島根藩	伯耆	今治	大坂	大坂	今治	大坂	愛媛	大坂	長野	大坂	尼崎	神戸	金澤	大坂			
章	柳	尼	讚	無茶山人	麥	古	公	寒	大	竹	巳	峰	文	青	白	勝	柳
泉	月	花	華	一	杖	美	草	榎	彌	喜	月	月	磯	舍	狂		



妻が居たらしへヤビンが落ちて居た
 青春は目と手で話す事多し
 古證文出して家柄人に見せ
 たそがれへ煙眞すぐ出雲製鐵會社
 春の雨繪具がほしい芽をふいた
 父である事も忘れて酔ひつづれ
 二號から貢がれてゐる不倖せ
 嵐山・臨時特設交番所
 子を持つた女給のうそを聞いてやり
 並木も過ぎてやつぱり無口なり
 妾して親孝行をしてゐるなり
 算盤へ夢をおいてゐる春の風
 他人様を世話した禮に不足聞き
 そり反る御辭儀もあつて朝の椅子
 さまよへば變らぬ情四日月
 蹄鐵のゆるんだ音で馬車は行き
 許し合ふ様にドアの鍵が下り
 失戀に夜の大阪を淋しがり

石川	大阪	島根縣	尾崎	前鋒	大阪	廣島縣	島根縣	大阪	今治	京都	今治	今治	島根縣	靜戶	大阪	靜戶
鈴の家	無駄男	柿丸	凡愚	斗風	大頭領	さいち	新七	可笑	笑朗	葉光	八十	路可	蛇の鷹	好郎	陽幸	靜山



VI

「俺が眠つたら絞めるだらう」

「さうか知れないわ」

阿部定といふ女は斯うした會話を
してわたしのあな
たを殺してしまひ
愛人の局部を切斷
して大事さうにそ
れを捕縛された日
まで持ち歩いたと
いふことである。
私は私の若かり
し頃の作

行末はどうあら
うとも火の如し
を思ひ出した。

特別議會がすん
だので塚本代議士
が榮つ葉服へ還元

したのを珍らしさうにいふが、あれが本來の姿ではないか。榮つ葉服であればこそあれだけの事が云へるのである。主張が通るならぬは別として誰でもあの手でなければならぬのだ。政治を旦那藝の一つにされては國民がたまつたものではない。

三井王國をはじめ、大毎、大朝が重役の停年制を敷いたがソレよりも今の日本にとつては一人にして二社の重役を兼ねることを得ずの法規を設けた方がいゝ。尤も法網を潜るための身代重役が殖えるだらうが、それにはそれとしての取締法を設ければいゝ。ウマイ汁だけ吸ふ重役でなく、眞に事業に打ち込む重役の増加は國家安定の第一歩であらう。

高濱虚子翁が歐洲へ俳句行脚に行かれ、四十日ばかりして歸つて來て示された句が

ベルギーにて

ベルギーは山なき國やチユリツプ

マルセイユにて

ハンカチの蝶と細りてなほ振れる

ださうであるが、無遠慮に云へばコレでは

ネーといふたい。前句は調子も悪るいし、内容から云つても天狗俳諧でも、コレ位な句なら出来る。

後句は平凡だし、センチだし、虚子老ひたり矣の感しか残らない。殊に蝶の文字こそあるがあれでは季題の價值ゼロ、季題はあゝして用ゆるものではあるまい。どうも臭い句だ。これでは世間的に人氣のない碧梧桐と人氣のある虚子との差幾何ぞやと云ひたい。

本社の賛助員池澤樂居氏の歌詞でボリドルから「戀の花櫛」「お菊の歌」のレコードが賣り出された。樂居氏は南海鐵道の粹な營業部長さんで、川柳は勿論詩でござれ俳句でござれ、短歌でござれ、繪畫でござれ、彫刻でござれ、なんでもやれぬものがない。あるところからあなたの趣味は何んですかと聴かれて、自分の趣味は何んだらうと部下に訊きに行つたといふ話がある位である。趣味の趣味くさいのはいけないといふ持論が趣味らしい。

阪大川柳會の尾崎方正氏が醫學博士の學

位を得られたので。

醫博たり椅子にはみ出る太りやう（路郎）の句をデヂケートした。

本號に「句盜」を執筆された澤田四郎作氏と尾崎氏とは同郷で中學の同窓だそうだが、澤田氏は東大出の醫博で矢張り椅子にはみ出る太りやうであるのも面白い。

五月廿六日の夜、三越の川柳會に招かれ三四十分喋べつた。主たる内容は句會の仕方についてであつたが、どうも斯うした特殊句會までが請負仕事の様な作句方法はいかない。もつと研究的にやれ、お互が堅くならないで意見の交換をする時間をつくれと忠告めいたことを云つたが、眞面目に傾聴されたので談甲斐を感じた。

六月六日の午後、ゼネラルモーターズへ自動車組立ての見學に出かけた。科學知識の乏しい私には何が何んだかハツキリしたことは判らないが、荷造された自動車がクレーンの力で山のやうに積みあげられるさまや、颯爽として新車の試運転してゐる職工姿をうれしく眺めた。玩具の自動車一臺

頂戴に及んで歸へり、翌朝こどもたちと、それで遊んだ。パンフレットについては一歩やアトが説明してくれた。もうそろそろこどもに教えられる時代が来たことを知つた。

六月十四日の午後天虎飛行場から藤本飛行士に同乗して琵琶湖上を飛んだ。別段珍らしくもないが危険も感じない。近江八景足下であり、比良、比叡眼下にありで、なかなか爽快である。チト稽古に來やうかなどと思つた。

綠雨君の句集「舊の雜音」が本誌と前後して不朽洞から出る運びになつた。書名も編輯も装幀もすべてまかされたので、かなり腐心した。型は同君の好みで菊半截にした。あの鐵のやうな綠雨君の句集であるから特異な味が出てゐる。殊に多年本誌のために苦闘した同君を嬉ざらう意味からでも精々御愛讀と御吹聴をお願いしたい。何れ次號に廣告するが、もう豫約して頂いても大丈夫である。定價は五拾錢。送料四錢。

開 店

喫茶店をはじめました。
氣易い店です。
御引立て下さい。（汀柳）

文樂座南の辻南
茶 房
川 柳

支那北京料理
佛蘭西風茶房

御宴會に御集合に

紅 噺 光

電話南一一八六番

市電戎橋電停西御堂筋東北角

某氏から次のやうな質問があつた。

「有保證でない普通の川柳誌や俳誌が二・二六事件等の時事吟を掲載致してゐますが、あれは貴誌の如く有保證でなくても違反でなきや。若し違反でないといへば有保證の効果如何」これは尤な質問である

から、一應府當局の見解を訊いてからお答へする積りであつたので御返辭を差上げなかつたが多忙で府廳の警察部へ行く時間がない。そこで私見を少しく述べておく。

たとへ時事が詠まれてあつても、その作品が文學的作品である場合は差支ないが、その内容が安寧秩序を

紊亂する虞のあるもの、思想的取締上忌避に觸れるもの、時事報導に過ぎないもの等々であれば不可である。今日の柳誌、俳誌の殆んどは法的違反を侵して顧みないので、彼等の多くが法律を知らないところから來て居るのである。即ち彼等は法的に無知なのであり、若し知つて之を侵して

川柳指導講座

講師 塚越 正 光氏
課題 「貯金」 一人一句

締切 七月五日
發表誌 九月 號
投句 本社 宛

川柳誌上相談

擔當 福田山雨樓氏
同 西田 艸 樂氏

川柳に關する相談であれば何んでもよろしい。直接の返信はいしません。隨時締切る。本社宛。

みるとすれば鬼の目にも涙で法的弛緩であるが、これ位ならといふ寛大なる取扱に乘じて、遂に危險地帯に足を踏入れてゐるとより解釋が出来ない。一例を挙げれば四月か五月かに、放送局で放送川柳を募集するに際し、これを

柳誌で報じるだけでも違法であるのに時事論とも見るべき記事を掲げてゐたのは違法である。例へ有保證であつても公安を害する記事は取締りをうけること勿論であるが、これ以外に於ては時事報導の自由を持つのである。何月何日何處で句會をやるといふのも時事ではあるがこの程度のものは大目に見がどうしたとか放送局がどうとか社會事象に對して報告や時評は一切出来ないものである。私は川柳により人間陶冶を志してゐるので、それ等の自由を獲得したまでである。

川柳家、畫家、文士、音樂家などがゐらつしやいます。小さい店ですけれどホームライクを愛して下さいます。是非お運び下さい。(霞乃)

南海本線玉出驛西二丁目
市バス玉出下車、横丁

洋酒 喫茶
キング喫茶室

各種旗

七寶徽章

メダル

カツプ

川柳雜誌社指定

大阪 上 六

加藤旗徽章店

各地柳壇

いちのあを句を創れ



路郎・柳汀・柳柳・柳柳

投稿 規 則

- 一、用紙はなるべく原稿用紙のこと
- 二、文字正確明瞭に記載のこと
- 三、開催月日及場所記入のこと
- 四、締切は毎月末日とす
- 五、投稿先は本社宛

川柳 上町句會 (大阪)

四月十五日 於誓得寺

廣原都會人報

席題 傘

紳 樂 選

繪日傘をくるくゝ祇園の坂を下り 天 國
春雨へ黙つて傘を持ち添へる 史 呂
網渡りいきが決つた傘をほり 與三郎
傘さしてバットさがせば折れてゐる 鮎 美
親切な傘へ半分濡れて行き 柳 笑
濡れ傘を指で支へた満員車 榮 壺
(秀) 汝女給傘を探せと酔ひたまひ 亂 耽

席題 猫

鮎 美 選

ふと抱けば身持ちの猫の息づかひ 朔 風
心配の膝にいつしか猫が居る 不 角
美くしい猫を芦屋の宅にみる 亂 耽
(人) 頼まれた毛色を生まぬ憎い猫 有 耕

(地) 仙人掌の棘に艶あり猫の夢 不 角
(天) 春雨に鈴を濡らして来た仔猫 德 三
(軸) うまいこと猫は主家を飛んでおり 鮎 美
(同) ほんとうの猫の姿は風をぬけ 同

席題 鋪 道 豆 秋 選

貧しさの委小さく行く鋪道 不 角
炎天の鋪道を鏝で焼く人夫 榮 壺
店員が鋪道の雨を見てる 晝 天 國

席題 浮 氣 與三郎選

浮氣ふと去年の春を思ひ出し 里 十 九
濡れ衣の女中涙の暇を取り 榮 壺
浮氣するつもりの中居酔ふて来る 亂 耽
春雨じや濡れて行こうと浮氣する 鮎 美
(秀) 長火鉢浮氣な指とからかはれ 汀 柳

席題 寺 町 里 十 九 選

寺町に近く墨色判 斷 所 世 間 音

寺町の榎のいはれ母に聞き 汀 柳
寺町に珠算教へる寺があり 豆 秋
ライスカレー寺町からの御註文 鮎 美
寺町の夜を走つた子の使ひ 同
(佳) 寺町で番地たづねるところがなし 豆 秋

兼題 青 葉 亂 耽 選

青葉、青葉遊覧バスはとび上り 豆 秋
古里の青葉の空氣吸ふて来る 有 耕
(人) ホトトギス聞かす青葉の山の寺 朔 風
(地) 青葉かな書齋の陽ざし變るなり 德 三
(天) 目薬を青葉の蔭において留守 鮎 美

兼題 レコード 汀 柳 選

(佳) 漫談のレコード外で誰か聞き 遊 歩
(同) レコードで稽古戻りの妓がさへ 世 間 音
(同) レコード屋少し踊れる女店員 里 十 九
(同) 借りて来た新譜はとつとと懸け 都 會 人

(同)ボレロを聞いて新刊書と宵寝 亂 耽
(同)霧圍氣をさのへビクトロラしうが 同
(秀)名曲もさて賀草となりにける 史 呂

川柳 今治支部 (今治)
雜誌社 夜櫻句會
四月二十日 今治南光坊櫻樹下 宵明報

兼題 壁 文庫選

壁一重壁に遠慮のいる隣 心府
世渡りの疲れに壁の色も褪せ 英賀夫
教へない事學校の壁に書き 同
この村の舊家の壁へ陽が残り 宵明
壁の文字大家の眼鏡見のがさず 柳石
野心家の嗤笑壁につきあたり 心府
小さき怒り壁へこれでもか 宵明

兼題 三味線 宵明選

三味線へ酔ふたくと踊つて出 柳石
三味線屋舞妓の手紙頼まれる 曉童
三味線をひく女房で二つ上 同
(軸)三味線の貴方へ義理を立てつづ 宵明
(同)三味線の艶且那さつぱり來てくれず 同

兼題 鳥打帽子 曉童選

鳥打が知る嬢はんの息使ひ 宵明
鳥打の姿顯官とも見え 文庫
鳥打で名士露店を素通りし 同
夜櫻へ刊事ではない鳥打帽 宵明
(秀)卒業へ鳥打帽が待つてゐる 文庫
(軸)鳥打で逢ふと先生笑ふなり 曉童

席題 講義錄 柳石選

油手で一枚めくる講義錄 文庫
(秀)講義錄姉がカフエーから戻り 宵明

兼題 胸上げ 心府選

胸上げへ祝電四通五通來る 曉童
胸上げへ秘書は帽子を拾つてき 宵明
胸上げは櫻の花の高さまで 曉童

兼題 夜櫻 互選

夜櫻で顔を合した戀仇 宵明
夜櫻へ今年の妻は子連れ 同
夜櫻へ子供を探す目は確か 柳石
夜櫻へ宿題半分残して來 心府
夜櫻を黙つて通る二人づれ 柳石
夜櫻を子持渡かれて歸るなり 曉童

川柳 竹原支部句會 (廣島縣)
雜誌社
四月十一日夜 於森川仙水居 承春報

兼題 溫泉 速射砲選

密月の二人が呉れた溫泉の便り 承春
(佳)湯疲れへ淺間の煙直う立ち 可笑
(兼題) 小 說 可笑選

兼題 生返事して小説に夜を更かし 芳泉

(同)生返事して小説を讀み續け 一二三
(感)小説へ作家の顔が浮んで來 仙水
ラデオ小説

(軸)ス、ハリなく腰ががすれてジ・エンド 可笑

兼題 マツチ 承春選

來客の煙草へマツチ擦つて待ち 一二三

ゆつくりとマツチ擦つて勝將棋 廣志
(佳)落葉焚くマツチへ風の強い事 青嵐
(同)袖屏風もうも消へたマツチの灯 速射砲
(地)まゝごとへマツチの箱がいのなり 芳泉
(天)媚てゐる顔にマツチの灯が強し 速射砲
(軸)燃え付かぬまどへマツチやけに擦り 承春

兼題 妾腹 芳泉選

若様と云はれて育つ妾腹 承春

兼題 旅 青嵐選

落魄の旅を續けてまい戻り 承春
出船へ故郷の町は暮れて行き 可笑
一人旅人の情をチトおそれ 承春
兼題 橋 一厘選

反り橋も花もうつして靜かなり 芳泉
夜の橋にのがれ都會の美に打たれ 速射砲
踊つてゐる様に丸木橋を渡り 若風

川柳雜誌社 大地句會 (鳥根縣)
兼題 川柳支部

三月十五日夜 於川柳亭事富美乃家

高松吟社との合併協議會等を兼ねて句會を開く。集る者十二名、盛會であつた。

兼題 願 草路選

懇願のビツ子は縁にもたれけり 太朗
子の願ひ夫婦笑つてうなづきぬ 海棠
兼題 脈 緑之助選

靜脈の青さに病んださびしさよ さわだ

頸動脈二センチそれて一人生き
脈を取る醫師冗談を言つてゐる 草路
脈をとる醫師のひたいに濃ゆき皺 凡愚
(地)山脈にまだ思ひ出のつゞなり さわだ

席題 寝不足 凡愚 選

寝不足の眼へ朝の陽が赤し 松濤
寝不足が段梯子をふみはづし さわだ
寝不足の女給寝巻のまゝで出る 朴泉

席題 忙し い 華村 選

いそがしいそれで嬉しい商賣よ 朴泉
忙がしく夜業の灯のもるゝ窓 凡愚
忙がしく暮れてよこびの灯が明し 緑之助

席題 さゝやき 大朗 選

さゝやきへ子供は素直にうなづける 凡愚
さゝやいて女同志はほゝゝめり 同
さゝやきは月光が吸ふ幸 緑之助

川柳 簀川支部小集 (鳥根縣)

席題 豫 感 一 鴻 選

豫感があたりましたと藝者来る さわだ
(人)ハツとして深夜の電話に集る眼 朴泉
(地)幸福は豫感に浸り煙草喫ふ 同
(天)もう死んだと病院の段梯子 さわだ

席題 女 工 朴泉 選

稻佐濱同性心中
春の刺戟に二人の女工死を急ぎ 一鴻
(佳)消燈にまだひそゝと話し 雨舟

(同)争議團女工の方がおさまらず 一鴻
(軸)平凡な空へ女工は欠伸せし 朴泉

川柳 梅田支部句會 (大阪)

二月八日 於遊步居 遊步報

兼題 酒 鮎美 選

酒飲めばうれしく見える人の顔 雨聲
コップ酒呑む日雇へ夕陽映え 美津生
(人)兄弟にされて地酒もうれしいね ト居
(地)酔狂の酒に心の影法師 雨聲
(天)逃げ口上酒の上とはうまいもの 静波
(軸)ほろにがき酒よ晝から湧いた雲 鮎美

兼題 借 家 方眠 選

新建の借家に住んで夫婦きり 觀月
借家みな赤い夕陽に照らされて 鮎美
竹の子が借家の庭でのびてゐる 雨居
廣すぎる借家二階を貸して 居る
借家だけ妻の名階でもちつて 朝居
大阪に出て来て借家の味も知り 静波
うららかに借家が並ぶ田圃道 鮎美
山が見え梅も咲きます 借家に 居
相愛のふたりで借家見つけて 來
まん中の借家は喫茶店になり 同
恩給の餘生小さく借家に居 方眠
(軸)當分は借家で辛棒する分家 方眠

兼題 風 鮎美 選

縁に風ビールの泡がちとこぼれ 觀月
みたされぬ夜のこゝろに風のおと ト居

(秀)寝ころべば樹影に青い風がすぎ 由布
(軸)友情に泣く傷心に風おちぬ 鮎美

席題 妹 卜居 選

妹の説も一應聞いてやり 静波
妹へ兄があやまる事があり 觀月
ばらにほふ夜の妹の詩集よむ 同
かき餅をやく妹のたのしみ 鮎美
(人)妹は向ふの方で花を摘み 觀月
(地)妹を連れて辻占賣りにゆく 同
(天)妹へ第二の戀がやつてくる 鮎美
妹の死
(軸)ほろゝと南京玉が落ちし夜 ト居

席題 線 香 觀月 選

線香を持ってば坊やは逃げて行き 秀峯
すねた兒の蚊遣に遠くかまれて 静波
行水をするのへ線香にほふて 來
線香のにほひ棒の花の落ち 朝居
線香へかほそき母の手がふる 鮎美
障子白ろゝ線香のにほふ朝 鮎美
線香をつぎに立つ妓のみだれ足 朝居
線香の煙天井までとどき 静波
線香のけむり女主人は生きむと 鮎美
線香の煙位牌の新しく 朝居
(人)墓参り子は線香を持って行き 美津生
(地)焼香へ連れた子供も香を立て 同
(天)ありがたき御經線香さしかへる 方眠

席題 野 球 静波 選

湯上りへスコア〇對〇つゞく 觀月
優勝の母校へそつとめがねふき 朝風

古本屋冷淡に値を付ける 某人
 古本で讀んだ知識を笑はれる 久米雄
 古本趣味和服の似合ふタイプなり 某人
 古本屋圍碁が上手で暇な午後 九天
 古本をあさる心へ灯がともり 明珠
 古本を猫がまたいで行きまし 水客
 古本へ父の眼鏡の度が強し 鮎美
 物足りぬ夜古本の字が小さい 九天
 定休日丁稚古本買つて来る 美濃路
 (人)古本を買ひにネオンの下を行き 久米雄
 (地)古本を買ふてオチヨボは雨を去に ト美
 (天)煙突の高さ古本屋を出かけ 鮎美

席題 子守歌 九天選

(人)子守歌いつか故郷の唄となり 同
 (地)細目に手心のある子守歌 陽幸
 (天)ウインドの中を見てゐる子守歌 白層
 席題 笑 ふ 蘇堂選
 強ひられた笑ひバーの灯暗いなり 九天
 張りげなく笑ふ心のうつろさよ 朝風
 笑はせてくれる男の色黒し 遊歩
 善人の下手な話が笑はれる 吞行
 笑ふだけ笑へと腹を立てゝ居る 幸捐
 遠慮なく笑へる家で茶の無心 某人
 爆笑へ蜜柑の山が崩れたり 水客
 幼子へみんな笑ひを強ひてゐる 凡樂
 満座大笑ひエンタツ澄ましてゐる 秀太
 朗かな笑ひ麗人手が動き 華水
 母の手に戻れば笑ふ隣りの子 美濃路
 恐れ顔笑へばエクトボのある男 陽幸
 笑ふ妻とても可愛い抜け齒です ト居
 笑ふ顔魚眼レズの子に勝てず 同
 笑ふ事ばかり女の手に勝てず 明珠
 笑はせに來る御用聞き親しまれ 久米雄
 (人)晝の酒何かおかしく故にづがれ 九葉
 (地)笑はせてゐる最中を呼びに來る 遊歩
 (天)二通話へ笑つただけで事がすみ 陽幸
 (軸)子が笑ふ迄シャッター待ちあどみ 蘇堂
 席題 苦 心 素生選
 發明へ過去の苦心がばつと知れ 吞行
 チュウリップの苦心した花小さいなり 九天
 犯人が苦心の刑事と寫される 水客
 苦心した事を上役知つて居ず 喜山

川柳 雜誌社 お旅句會 (大阪)

名幹事鉛筆の要る用が出来 九葉
 咽喉佛大きく動いた苦心談 華水
 苦心した大げくを妻に嘲はれる 蘇堂
 成功の苦心を聞くに金が要り 同
 苦心談聞いて其の氣も其の場だけ 冬扇
 苦心談父は入齒をはづすなり ト居
 苦心して出來て太い息をつき 正虎
 苦心して雜誌の附録出來上り 幸捐
 苦心慘憺五十錢を借り 久米雄
 苦心談記者簡單にまとめあげ 眞一
 善後策父頭が痛くなり 某人
 (人)宿題へ父も苦心をする氣なり 紫香
 (地)遊ばせるプラン幹事に揉めが出来 紫人
 (天)苦心して逢ふ夜女の愚痴を開き 朔風
 (軸)苦心して探した話から座り 素生

席題 寫 眞 史呂選

ちんくを出して一人兒うつされる 雀踊子
 席題 あ の 頃 圓角選

あの頃のあや美は好きな書など書き 新水
 あの頃がどうしたと言ふ締りやう 路郎
 あの頃の彼女へ搜せた君なりし 同
 あの頃は本を賣つても逢ひにゆき 同
 (軸)あの頃はあや美君と人生等語り 圓角

席題 靈 前 多郎選

靈前に君白百合が好きだつた 史呂

フリージャをかなしき靈の前におき 葉平
靈前ですまない過去が浮んで來 正一
靈前に託びる瞳をそらしけり 雀踊子
靈前に人間もろく涙して 同
靈前へ巻帶でゆく不孝者 玲峯
兼題 雲 夢裡選
雲晴れてハイタの脚に勇あり 青一
青雲歸る子守の影 長く 史呂
兼題 石 路郎選
石運ぶ馬も人夫も春の汗 史呂
(人) 尋ねればたゞ一塊の石なりき 雀踊子
(地) 丹念に石屋の刻む從一位 新水
(天) 石の柱株式會社三井銀行 葉平
(軸) 石を見せて三百年は日が永し 路郎

川柳 高知句會 (高知)
兼誌社
四月廿一日夜 於カフエーブラジル
席題 給 仕 春水報
春水選
また留守に給仕もすまぬ顔をする 濁水
(佳) 給仕々々私用ばかりに使はれて 春水
席題 ゆく 春 春水選
ゆく春を木の芽は伸びるばかりなり 水魚
逝く春へ胃散の罐が空になり 青果
水魚
席題 水族館 水魚選
水族館退屈さうな泳ぎやう 水魚
水族館 六絃

兼題 勘ねる 柳翠選
飯事の一人が勘ねて位置を替へ 水魚
兼題 夜更かし 六絃選
女房は無いことにして夜を更かし 青果
夜更かしの我が家へ向いてから淋し 春水
兼題 眉 濁水選
父親の眉毛の長さ有難し 春水
川柳 お旅句會 (大阪)
兼誌社
一月十日夜 於道頓堀 せきぐち
席題 初 詣 翠夢選
初詣妓の顔すつと通り過ぎ 多郎
初詣一年中の手を合はせ 勇
柏手が自分にかへる初詣 史呂
明けきつて面はゆく並ぶ初詣 琴人
(佳) 初詣恵方はそれてゐるのなり みつる
(軸) 初詣母子の肩へ鳩が舞ひ 翠夢
席題 ラウンドガール 與三郎選
ラウンドガール父の酒癖思はされ 路郎
ラウンドサーピス御世辭云ふこと忘れない みつる
兼題 情 婦 汀柳選
情婦ふと肩毛落してみたくなり 史呂
おとがいをうめて情婦の惱ましく 翠夢
(軸) 情婦もう別れる肚で不貞疑する 汀柳

兼題 獨 酌 路郎選
獨酌の隙間の風感じて居 與三郎
獨酌へ國の雪など思ふ夜 みつる
獨酌のしばし女將にからかはれ 同
逞ましい腕獨酌の朗らかさ 琴人
劍のある女ひとり吞んでゐる 汀柳
満洲に來て獨酌にも馴れて 同
(人) むづかしい事はまかせて一人飲み 琴人
(地) 獨酌はすねてゐるのでないのなり 汀柳
(天) 自暴酒の哀れは人を寄せつけず 與三郎
川柳 天王寺句會 (大阪)
兼誌社
三月廿三日 於葉光居 山本葉光報
兼題 彼 岸 豆秋選
御座居の髪結び直す彼岸入り 銀濤
焼芋を買ふて彼岸の留守をする 天國
(佳) お鏡を割つて彼岸の陽にさらし 榮壺
(同) 眩げな老ひたる人と逢ふ彼岸 榮光
(軸) お彼岸を乞食の犬も座らされ 豆秋
席題 勝 氣 清記互選
色街で男ざらひをたて通し 豆秋
ブローズも勝氣にはいて夜を生き 德三
女房の勝氣へ云へぬ失業者 榮壺
洗濯と掃除が好きで勝氣なり 榮光
席題 家 鴨 葉光選
伸ばしきる家鴨の首へ春うらら 德三
家鴨ある池へマツチの軸を捨て 天國

(人)家鴨の子泥鰌の太いのにあわて 豆秋
(地)鮮人の洗濯の音に家鴨逃げ 徳三
(天)童謡の作家あひるも飼つてゐる 彩泡

枕もとコツプが轉げてゐる 朝寢 豆秋
席題 爆 彈 彩泡 選

爆彈は不發しづかな春の雨 葉光
席題 風 船 榮 壺 選

風船の高さへ母も口を開け 銀壽
風船の赤いのもよし女の子 天國
風船はつぼむたんびに笛が鳴り 彩泡
風船を持った子がゐる 婦人 席 豆秋
初生兒へ風船さした 江戸 簞笥 葉光

川柳 御旅句會 (大阪)
席題 表 情 多 郎 選

そのまゝが漫才である 顔を曲げ 汀柳
(轉)ウインタを肩掛けそつと受けてゐる 多郎

淋しさは濡れて歩いても見たくなり 邦典
濡れてゐる眉へハンカチもの足らず 多郎
濡れる妓を横目で傘のしづくふる 同
煽情な女給の唇の濡れ光る 翠夢
濡れ燕相合傘をはすかひに 汀柳
(轉)いつの間か屋根が濡れてゐる春の雨 同

兼題 眉 毛 翠夢 選
眉毛落して銅壺の守をする 多郎

兼題 香 水 汀柳 選
おちよやんの何時か香水つけてゐる 翠夢
連れて出た妓と香水の賣場見る みつる
香水の好みも芦屋夫人なる 翠夢

川柳 松江句會 (松江)

三月五日夜 於天神町來迎寺 祥月報
兼題 名 所 祥月 選

(佳)浦島になつたこゝちのいつくしま 正雄
席題 寢 不 足 正雄 選

だまされた夜の 瞳の にごる 朝 玲 兒
席題 溫 室 三雷波 選

だまされて咲く温室のさくら 草 莞 路
温室の花正直に咲いてゐる 天痴人
蝶の來ぬ温室の花物足らず 柳人

席題 戒 嚴 令 柳人 選

戒嚴令? 萬年床で髪を撫で 山川 兒
雲は重たく戒嚴令の都 光二郎
戒嚴令またしく星の眞下なる 三雷波
戒嚴令雲はしづかに流れ行く 正雄
戒嚴令息の止つた街になり 三雷波
戒嚴令 巷は音を忘れたなり 莞 路
九千萬の意識に青し戒嚴令 天痴人
戒嚴令空の財布が落ちてゐる 莞 路

席題 枕 玲 兒 選

手枕へ衣ずれがしてお冷なり 正雄
不眠症の頭と枕知つてゐる 天痴人
枕カバー不平も言はず汚れてゐる 同

川柳 天王寺句會 (大阪)
兼題 留 守 大朗 選

四月十八日夜 於葉光居 山本葉光報
題 風、愛、頰冠、本疊打、團子 互 選

一匹の虱みんなをかゆがらせ 彩泡
頰冠りとれば花びら二つ三つ 同
均衡を大きく破る本疊打 同
愛の結晶アバウトで生れ 史 呂
頰冠りやめ暮しの煤拂ひ 同
公園のベンチ虱をとるところ 同
背の子に團子細工の壽司が出来 葉光
名優の人形も型の頰冠り 同

川柳 大地句會
兼題 留 守 大朗 選

四月一日夜 於富美乃家 凡愚報
兼題 春が來た 綠之助 選

春が來た弟の好きな蓬餅さわだ 田鶴緒
春や春かげろう燃ゆる腹が減る 同
山は雪街には春の灯がともり 海 棠
(人)電車、バス春の匂ひを選ぶなり 同
(地)春風ふんわりやせた毛ずねを吹いて去に 雨舟
(天)老眼鏡はづして春の欠伸する 凡愚

兼題 留 守 大朗 選

兼題 留 守 大朗 選

兼題 留 守 大朗 選

兼題 留 守 大朗 選

兼題 留 守 大朗 選

兼題 留 守 大朗 選

留守ですと言わぬばかりの猫の顔の顔さわだ
四月の日曜「今日は」訪へは留守 田鶴緒

席題 縁 談 田鶴緒選

縁談へ娘うなづくばかりなり 海棠

(佳)縁談に娘はんのりあかい顔 新出樓

席題 薄 情 凡愚選

薄情と云われ激務に追われてる 田鶴緒

薄情な女にされて煙草の輪 縁之助

席題 晩 酌 笑朗選

漁火ちろり晩酌の頬がやけ大朗

席題 印 象 一鴻選

思出はブラットに泣きし日の印象 田鶴緒

春宵なまぬるく印象は戀となる 縁之助

だまつて酒飲む男だつたなあ 朴泉

川柳 雜誌社 竹原支部句會 (廣島縣)

三月二十日 於速射砲居 承春報

兼題 歌 心 速射砲選

繼母の心へ子供おびへ切り 承春

獸心へ今日しみんと人の情 芳泉

獸心のふと肉親を考へる 承春

そぞも人間かと云へば冷たく笑ふ 芳泉

(秀)體臭に我が獸心をさすられる 可笑

兼題 瞬 間 可笑選

瞬間の痛さは永く涙ぐみ 若風

油断した其の瞬間を叩かれる 承春

(秀)舞ひ落ちた刹那に消ゆる春の雪 同

兼題 青 春 承春選

啞なれど青春のめざめか薄化粧 若風

(軸)青春期結び直した帯の巾 承春

席題 嚙 芳泉選

(秀)嚙とは違ふみなりで戻つて来 承春

(同)鍵穴へ嚙の主をのぞきに來 同

引越の年増へ變な嚙立ち 若風

嚙して居たところですと上がられ 一二三

(軸)嚙だと聞き捨てならぬ顔になり 芳泉

席題 舞 妓 互選

運命を背負ふて舞妓橋に立ち 可笑

姉さんの旦那舞妓は先に歸へされる 速射砲

マア旦那などと舞妓に取まかれ 芳泉

舞妓もう旦那に負けぬ口をきく 可笑

のろけ云ふ事も舞妓は知つて居る 承春

賑やかに舞妓たわむれながら行く 芳泉

冷へて行く夜へ舞妓の居眠りし 青嵐

席題 電 車 互選

終電車子供もあらう女給乗り 可笑

呑み過ぎてもう間に合はぬ赤電車 同

花電車町の女王の様に行く 芳泉

電車道横切つてから汗を拭き 一二三

終電車今日の生活をふと思ひ 可笑

ダンサーが疲れ切つて居る電車 同

満員電車が續く花日和 芳泉

夜のしどろも遠く電車のきしる音 同

川柳雜誌社 兵庫支部 岬柳社句會 (兵庫縣)

四月二十日 於和田宮通衛生事務所

兼題 無 口 陽幸報

年頃になつて無口を自覺する 朝村

だまりこくつた儘で櫻の下を行き 久米雄

御近所の手前無口をたしなまれ 白層

アパートに無口の女金を溜め 陽幸

三男の無口父親氣に入らず 白層

薄寒し寝て無口者夢もなし 麥刀子

無口者唄へば三の糸が切れ 仲路

一人だけ無口のモガが來て座り 奈落

失戀の女無口の儘別れ 陽幸

桃咲いて無口な老夫婦の閑居 陽幸

青柳にいゝ咽喉をする無口者 仲路

妓ふと無口の人へ笑ひかけ 久米雄

早寝する良人の無口さびしがり 麥刀子

(軸)うれしさを言ひ表はせき無口ある 明珠

兼題 履 歷 書 某人選

履歷書を持ちまはる身に花が咲き 奈落

履歷書一枚我が一生は託される 浩基

履歷書に春一日がつぶされる 青磯

履歷書へ妻茶柱を持つて來る 仲路

履歷書三十路に近く哀れなり 麥刀子

卒業が迫り履歷書書き續け 雲泥

(人)履歷書へ轉々とした過去を持ち 白層

(地)寝て書いた履歷書のぞろぞろ居す 吉左右

(天)履歷書の履の字が滲む畫の雨
仲路
人

席題 春の宵 麥刀子選

ほろ酔ひの唄の輕さも春の宵
久米雄

新婚の足が揃ふて春の宵
陽幸

春の宵素面へあつてなく更ける
某人

貨物車の長さに春の宵は降り
陽幸

春の宵足は向くとこ向いて居る
吉左

火の消えた儘の火鉢も春の宵
某人

陳列の中も變つて春の宵
流泉

席題 終電車 伸路選

終電車ふと潮風がにほつて
白層

終電車へネオンの赤さ未だ消えず
某人

終電車心贅しく酔ふて乗り
麥刀子

洋傘を上げて間に合つた終電車
吉左

ダンサーの寒々揺れる終電車
麥刀子

終電車もたれる様に掛けて居り
明珠

(佳)終電車仲居の髪が重たそう
白層

(同)終電車煙草のほしい車掌の眼
吉左

席題 長 い 吉左右選

辛棒をして來た年を省みる
明珠

田舎驛次發を長う待たされる
陽幸

母と寝て長い話を聞かされる
麥刀子

國からの手紙が長い納税期
某人

石段の長さが母へありがたし
仲路

氣が長い事も意見の中にあり
明珠

野遊びに貨物は長い晋で過ぎ
麥刀子

父親に頼めば長い針を出し
明珠

席題 洋 裝 陽幸選

洋装がにらんでよける散水車
靜水

人込みを出て來る洋装振り向かれ
治郎

洋装も似合ひお嫁の話など
明珠

洋装の一と際目立つ汐干狩
麥刀子

洋装の膝が崩れた水入らず
某人

洋装に又洋装の連れがあり
明珠

洋装をあきれて見てる祖母の顔
治郎

洋装が似ついて姉に嫌われる
同

洋装の鋪道カッチリ踏んでゐる
白層

(佳)ハイヒール男の足に負けて居る
同

(同)洋装で歸る故郷は春の雨
久米雄

阪大川柳會 (大阪)

四月二十七日 於惠濟會館 利生報

兼題 未 練 路 郎選

未練なことを云ひ給ふなと飛車を
千秋

もしやといふ未練女もち
路生

無いものと諦めきれぬ差し向ひ
柳秀

慰める母が未練なことを云ひ
同

未練などござのませぬと面を伏せ
君女

欺されてゐたとは知れど忘れかね
同

未練らしい何云ふてんのや女將來る
利生

未練なんかおますふいと妓酔ひ
同

先妻の良いところだけを思ひ出し
淺女

未練にも朝をまどろむ春の床
同

毛よりも細き未練がニヒリスト
方正

未練氣たつぶりな 祖母の丸髷
某女

(人)失戀の思ひきりよを案じられ
君女

(地)割きれぬ心残して尻を上げ
芳一

兼題 水 路 郎選

(天)そらあたしの方はと妓なくはかり
利生

槽になつた所から變る水の色
柳秀

あれだけの水で金魚は生きて居り
同

水葬は船を廻しただけのこと
同

水だけの自慢借家の札がとれ
千秋

妥協と合流淡々として五十年
方正

邪魔くさそうにボーイ水を呉れ
路生

酔さめの水も知らずに死んぢやつた
同

改札のある時水をうづて居り
某女

純喫茶ワンウオターでねばつて
同

水代まで要る都會を母いとひ
同

殆んど水ばかりといふ化粧水
同

帳場まで出て來て幹事水をのみ
同

行雲流水先だつものは金であり
同

覆水へ水を命ずる程になれ
利生

ウィークエンドは盆栽へ水もやり
同

戀のボツクスへアイヌウオター撒かれて
同

水溜り豫報の櫻散つて來る
同

敏捷さ水すましにも似たあいつ
路生

夏の街今度はうちが水を撒き
君女

(人)Bランチ水と一緒にもつて來る
路生

(地)泥水に住まぬ鮎こそ餘とけれ
正市

(天)盛装へ何をひがむか撒水車
淺女

雑 吟 路 郎選

頑な下婢のやうなり松の枝
利生

愚直なる人にさも似て杉はのび
同

枝ぶりの時代めいたる冬の柿
同

尻上げて来れば床屋は公休日
快復期土堤の土筆を摘みに行き
もう足袋の我が子に合はぬ面白さ
せらぎに足を浸してみろ五月
シローの一人海が見え海が消え
(人)春や春キヤンデイに似た戀する
(地)ヒマヤ杉何か吊るせさいふから
(天)市電代返すにもめる女連

席題 洗面器 路郎 選

春うらへ井戸へ洗面器を運び
洗面器に充ててゆくのを教へられ
お早ようと云ふ手にさげた洗面器
洗面器早出の顔が洗はれる
洗面所の一輪さしは枯れたまゝ
洗面器女ダイヤを思ひ出し
洗面器とつち押ししても出るは水
洗濯もついでにします洗面器
洗面器ついでに借りる二階借
(人)今起きた音を立てる洗面器
(地)洗面に木の芽の匂ふ朝となり
(天)洗面器ホットの方は修理中
(軸)洗面所妓は朝日まぶしがり
(同)洗面器女の客は譲り合ひ
(同)洗面器さて勘定が氣にかゝり
(同)洗面所僕にまかして置けといひ
(同)心得て妓の運ぶ洗面器

耕朗君歡迎川柳會 (松山)

二月六日 於晴朗食堂 大樓報
臺中支部幹事宮内耕朗君結婚のための歸松

を迎へ一夜川柳會を開く會する者、五健、雲
子、大觀、素泉、晴朗、耕一路、かき松、大
樓の諸氏

題 新家庭、春の感じ 互 選

遠山の雪へボスター花便り
巡禮が目立ち初めて雲雀鳴く
春の感赤さが映る肉桂水
春と云ふ感じ仄かに指の先
抑賣へ夫婦して出る新家庭
投げ入れの趣味に氣が合ふ新家庭
座布團が一枚足らぬ新家庭
新家庭愚友が來た賑やかさ

古志原小集 (島根縣)

春季皇靈祭の日に偶然畑塚柳大佐居に集つ
た滋南、祥月、天痴人、山川兒、月山、文兒
臯人と居主とで久方振りの句作に耽る。

題 スクラム、離座敷、簀、醉ふ、 祥月 報

WCすつかり酔ふた足を知る 天痴人
色街をゆく相傘ははばかり 同
相傘へ待合の灯の更けてゐる 同
ほろ酔ひの頬杖で聞く三下り 臯人
酔ふほどにマダム挑戦の膝となり 柳大佐
小説のやうな離座敷の情痴 同

耕一路居小集

三月十七日

題 かち山 互 選

本懐の兎いつまで漕ぐつもり 漫歩

土 筆 互 選
乗り遅れ驛の近くで土筆とり
春日遅々と土筆二三本 耕一路

題 鑑 互 選

寶物の鑑へ無駄な値をつける 五健
櫻散る中緋絨の美しさ 耕一路
緋絨の袖躍らせて一人斬り 同

吹揚吟社 (今治)

四月十三日 貯蓄銀行支店 宵明 報

席題 橋 宵明 選

橋の上忘れたものを思ひ出し 心府
橋の上破つて捨てた勘定書 同
鐵橋の音と知つてる寢臺車 同
村長の話が長い橋の上 曉童

席題 臨 檢 互 選

臨檢へまだ十六とありにけり 心府
臨檢へ瓦は白く光つて 宵明

兼題 勞 働 曉童 選

勞資協調櫻の花も咲きほこり 宵明
電柱の上の仕事は見上げられ 心府
菜つ葉服脱ぐ間一本あたゝまり 宵明
(軸)働いて文句云はさぬ膳に付き 曉童

兼題 街 路 樹 心府 選

街路樹へ旅の鞆を持ち替へる 宵明

兼題 霞 互 選

霞の中に戀人もゐる 宵明
霞かすんで波の音のみ 曉童
春霞菜種は夢を見てゐます 宵明



窓の編輯

生 郎 路

▼又遅刊。今度は一週間は取戻せる筈だったが印刷所との手違ひからこの始末である。これ以上云ふべき言葉がない。今暫くお目こぼしを乞ふ。

▼六ヶ月間にわたつて執筆を煩はした啞三味氏の川柳時評「東京から」が本號で終つた。同君が別稿で述べてゐられるやうに時評を時評としてうけとることの出来ない人達のおつたことは甚だ遺憾であつたが、それだけ時評の必要を痛切に感じる。同氏の勞と御愛讀をたまはつた方々へ感謝する。

▼ユーモリスト生方敏郎氏が特に本誌のために「川柳風景」一篇を寄せられたこと、醫學博士澤田四郎作氏が「句盜」一篇を寄せられたことは本號の誇りとするところである。同氏は又民俗學研究家として知られてゐる共に御愛讀を乞ふ。

▼前號で一寸洩らしておいた三越ホレルでの會合は遅刊の際大々的な催をして一層煩雜さを増すことはどうかと思ふので無期延期にした。

▼汀柳君の茶房「川柳」は六月十五日に蓋をあけた。従つて同君は當分多忙である。借家經營の方も既に棟上げをしたので、これ又多忙である。

▲巻頭社告の通り事務所を廢止して總てを發行所で行ふことになつたので御諒承を乞ふ。「柳界展望」や「川柳書架」など何れも次號へ割愛した。これ又お宥し願ひたい。

小 生 儀

此度北支那察哈爾省張家口（北京の奥）に『カフエーオペラ』と稱し支店開設致し去る四月十九日より營業しつゝあります。

内地柳人で北支見學に御來支のお方は御遠慮無く是非御一報下さるませ、北京方面のガイドをさせて頂きます。尙小生と松代と一ヶ月交代で北支熱河相互に居住しますから通信は従前通り熱河の方へ願います。

北支那張家口東安大街一七號

支 店 カフエーオペラ

（電話二三五番）

滿洲國熱河省凌源南大街

本 店 カフエーモダン

（電話一二六番）

岩 崎 柳 路
同 松 代

川柳雜誌案内

大發字十四字、三行、金五十銭、一冊増すこ
ごに金十銭（但し前金切手代用可）その他
改題、社務、切手案内、細書廣告、その他

路郎先生染筆

路郎先生筆、掛軸、横額小物、
短冊を川柳家に限り左の通り
で頒布致します。

軸箱入 貳拾圓・額 貳拾圓
小物 五圓・短冊 參圓
御申込は前金で發行所へ

句會案内

本社句會案内御希望の方は左
記へ御申越下されば、其の都
度お知らせ申上ます。

社内會報係

青木史呂

合本特賣

川柳雜誌の合本第二卷より第
十卷まで。

各一卷 金壹圓五拾銭
第十一卷及第十二卷 金參圓
送料大阪市内 一冊六銭
市外 一冊廿四銭
御申込は前金で川柳雜誌社へ

投句用箋

川柳雜誌投句用箋の昭和十一
年度新製が出来ました。投句
には本社正規の此用箋を御使
用下さい。

五十枚綴 二冊 金拾貳銭
（送料共）

御申込は川柳雜誌社へ
切手代用も可

残本分譲

川柳雜誌の残本が少數宛あり
ますので、左の通りで分譲申
上ます。

第二卷より第三卷迄 一冊 十五銭
第四卷より第十一卷迄 一冊 十銭
第十二卷 一冊 二十銭
（送料一冊一銭）

御申込は前金で川柳雜誌社へ

懸賞川柳

課題「鬚」 六月十日
課題「避暑」 七月十日

用紙は官製ハガキ（化粧柳壇
と明記の事）
賞品は秀逸数句に薄謝を呈す
選者 麻生路郎氏
宛先 大阪府西成區玉出本通
三ノ三六 麻生路郎氏方
化粧新聞社柳壇へ

朝報柳壇

雑吟を募る 用紙ハガキ
川柳家の雑筆を歓迎する

選者 増位汀柳氏
宛先 大阪府天王寺區上汐
町一丁目増位汀柳氏方
大阪朝報社柳壇へ

川柳家名鑑

全國川柳家名鑑の作成に取掛
つてゐます。左の通り御記載
の上ハガキにて御報らせ下さ
る様お願い申上ます。

姓名・雅號・生年月日・
現住所・職業・簡単な柳歴
宛先 川柳雜誌社内
係 増位汀柳

川柳を作る人、愛好する人の
必讀誌

川柳俱樂部

毎一日發行
一部廿銭・送料一銭
東京市牛込區拂方町一四
川柳俱樂部社

轉居

このたび左の所へ移轉いたし
ましたどうぞよろしくお願ひ
申上ます
大阪府住吉區平野西之町七一
福田鶴峰

大夕柳壇

雑吟を募る 用紙ハガキ
選者 増位汀柳氏
宛先 大阪府天王寺區上汐町一丁目増位方
大阪夕刊新聞社柳壇へ

川柳きやり

菊判每號七十數頁
毎月一日發行一部廿五銭
東京豊島區高田本町二ノ一
四六八 川柳きやり吟社
（取次所）川柳雜誌社事務所

川上三太郎主宰
（毎月一回發行）

川柳研究

異色ある本誌の創作欄
と初心者への入門欄を
アナタは絶対に見逃し
てはけません
見本希望者は二銭切手十枚
同封左記へ
東京市王子區上十條町八五〇
發行所 川柳研究社

質助員

客

末員

眞田	青木	明石	阿部	江戶	後藤	近藤	朝田	福田	松下	村松	中澤	竹内	立井	吉川	吉田	岡田	丘田
幸史	柳一	みつ	青	新	鶴	小柳	夢	少	裡	水	西	おき	登	美	防	啞	人
損足	玄杉	杉	兒	勇	水	峰	裡	水	西	おき	登	美	防	啞	人	重	人

人	首	須	關	妹	毛	廣	廣	東	日	姬	平	平	平	水	宮	喜	北
藤	崎	本	尾	利	原	都	田	谷	野	田	井	井	井	谷	岡	多	山
竹	豆	雅	變	九	會	六	開	華	夕	與	三	春	蒼	鮎	白	春	悟
楓	秋	幽	人	波	人	浦	路	水	鏡	郎	郎	光	太	峰	秋	郎	

麻生路郎	主幹	福田山雨樓	支社長	住田亂耽	麻生葭乃	増位汀柳	山本雨迷	西田艸樂	橋本綠雨	編輯局(同人)	庄萬よし	山本丹路	永田里十九	高橋かほる	春元紀太	生田翠夢
------	----	-------	-----	------	------	------	------	------	------	---------	------	------	-------	-------	------	------

編輯局（同人）

上町支部	(大阪市) 幹事 廣原 都會人
今里支部	(大阪市) 幹事 市場 沒食子
光耀會	(大阪市) 幹事 增位 勇多子
西條支部	(愛媛縣) 幹事 荒井 英賀夫
大鐵局支部	(大阪市) 幹事 植山 九天
松江支部	(松江市) 幹事 奈良井 柳人
御池橋支部	(大阪市) 幹事 宮 白峰
鶴町支部	(大阪市) 幹事 須崎 豆秋
天王寺支部	(大阪市) 幹事 江戶 みつる
御旅支部	(大阪市) 幹事 酒井 大樓
松山支部	(松山市) 幹事 酒井 大樓

今治支部(今治市)幹事月原宵明
光笑(會)(大坂市)幹事永田里十九
伯耆支部(鳥取縣)幹事三鴨美笑
竹原支部(廣島縣)幹事松井可笑
市岡支部(大坂市)幹事平井春光
十三支部(大坂市)幹事淺野牧人
臺中支部(臺灣)幹事宮內耕朗
兵庫支部(神戶市)幹事濱田久米雄

投稿規定

▲投句は總て葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▲「近作柳樽」は全家の雜吟を募る。
▲「川柳塔」への投句は同人に限る。
▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事
▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
▲書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記の事
▲締切は嚴守されたし。
▲投稿其他につき御問答はすべて返信料封入の事。

募 集

第十三卷第八號課題

六月五日締切

(各題十句以内)

▼喫茶店 増位 汀 柳選
▼友だち 喜多 春 秋選

第十三卷第九號課題

七月五日締切

(各題十句以内)

▼覺 悟 福田 山雨 樓選
▼噂 吉田 水 車選

每 號 募 集

▼近作柳樽(十句以内) 麻生 路 郎選

▼各地柳壇(會報)

▼文章(評論研究感想吟行漫文)

社 告

社務一切は發行所宛

定 價

一 部 金 參 拾 錢
半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
壹箇年前金(特輯號共)參圓六拾錢

廣 告 料

本誌への廣告に就いては發行所へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

▲御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▲誌代受領は送本によつて御承知願ひます▲送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▲御希望により集金郵便を差立てますが御不在中にでも預ける様に願ひます、但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます▲御注文には何月號よりと御指示願ひます▲轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▲川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和十一年五月廿五日印刷
昭和十一年六月一日發行

第十三卷 第六號
(毎月一回一日發行)

有 限 公 司 新 報 社 刊 行

編輯兼發行印刷人 麻生 幸二 郎
發行所 大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
支 社 大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地
支 社 東京市蒲田區女塚町一三三七
支 社 川柳雜誌東京支社

川 柳 雜 誌 社

電話天下茶屋二五七九番
振替大阪七五〇五〇番

賣 捌 書 店

(大阪) 大賣捌大寶書店、明文堂、其他、市内各書店、
(東京) だん東京堂、だん巖松堂、やう吉岡書店、あさ玉森堂、
伊國屋、さん三味堂(神戸)、米田、寶文館(函館)、石塚(京都)三宅(名古屋)靜觀堂

製版も紙型も印刷も

一手にお引受けいたしますので大變
重寶がられてゐます御用命下さい

大阪印刷紙型製版所

大 塚 峻 三

大阪市西區南堀江上通四丁目十番地
(但シ市電立花通電停西へ半丁)
電話 櫻川(64) 四六〇一番

清 酒

白鶴禮讃

白鶴が縁とはなりぬ君と僕
 よろこびに添へて白鶴届けとき
 白鶴の方に幹事は極めちまひ
 母親も白鶴ならと一つ受け
 白鶴をいつもさらさぬくらしむき

攝津灘

嘉納合名會社釀



榎林医学博士推奨
片瀬医学博士監査

安産のために

ブカルシウム錠

片瀬医学博士述「安産のために」進呈



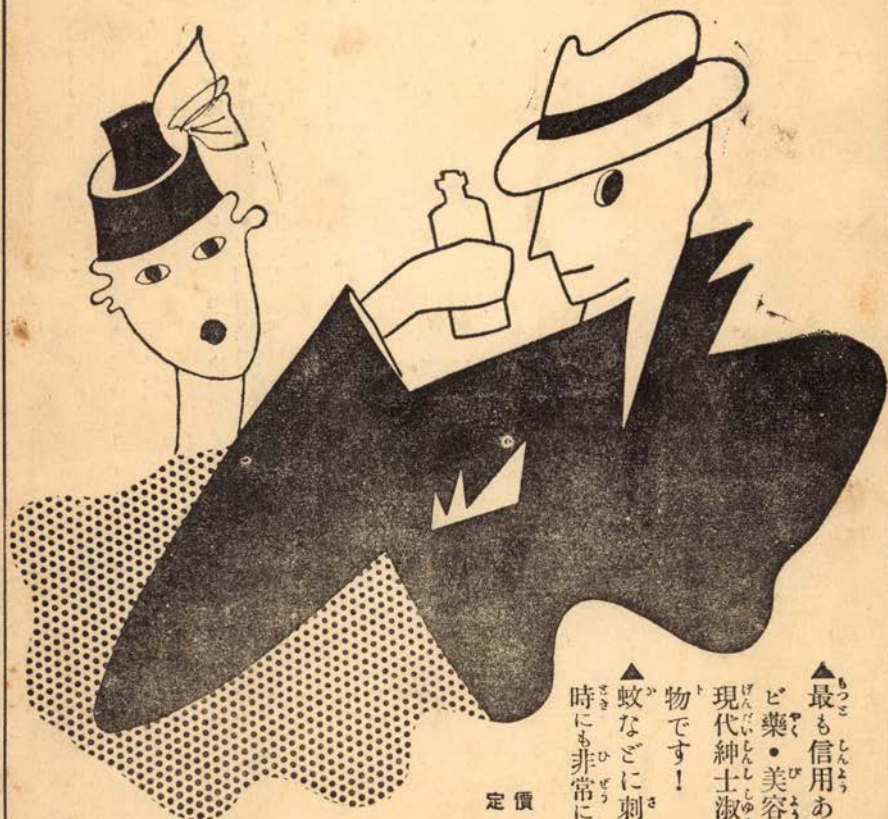
元 売 發

店 商 助 卯 田 和 町 修 道 阪 大

水顔美びきにと

うせまりこを物^{もの}の出^で吹^ふきびきに

うせまりなに麗^れ綺^きらか地^ぢ生^き



▲最も信用あるニキ
ビ薬・美容剤！
現代紳士淑女の愛
物です！
▲蚊などに刺された
時にも非常によし！

定 價
.30
.50
1.00

館天順谷桃 株式會社 舖本